
魔法先生ネギま！ 一二つの顔は誰の為？

黒薔薇＝神羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ―二つの顔は誰の為？―

【Nコード】

N8723W

【作者名】

黒薔薇Ⅱ神羅

【あらすじ】

兄さん！　そう言いながらネギが後ろを追い掛けて来る・・・
でもな、ネギ・・・俺は―

ネギの兄として転生した主人公
時を超えて二つの顔を手に入れます
さて、その二つの顔は誰の為に使うのでしょうか？

ドタバタ？ラブコメ？色々定まらぬジャンルで突き進みます

基本的に漫画と同じ様にイベントを行います

(注..若干キャラクター達の雰囲気が粉碎しているかもしれませんが
のでご注意ください)

1 話テンプレによるテンプレなテンプレ

俺は今純白の世界に居る

単に純白と言っているが、事細かに言うとなると

何もない

影もない

音もない

全てが無い

そんな世界

「ここはどこなのだろうか・・・」

そして何で俺はこんなありえない世界で冷静で居るのかというと

ぶっちゃけ、ライトノベルやゲームなどが好きでトリップとか異世界とかの小説を書いていたからなのである！

まあどれも恥ずかしすぎて誰にも言っていないが・・・

そんな風に考えていると音の無いはずの世界に音が響いた

カツンカツン・・・

俺は音のする背後へ振り向く、すると

そこには美人なお姉さんがこちらへ歩いて来ていた

そして、俺の目の前まで来ると

「申しわけありません!!!!!!」

思いつきり土下座かましてくれました・・・

「は？」

もちろんこんな綺麗な人に謝れるような事をされた記憶は無い

「いや・・・ちょっとよくわからないんですが？」

それから一向に謝り続ける彼女をなんとか冷静にさせて話を聞く

「つまり・・・貴方が槍を振りまわしていたらすぽ抜けて下界の俺の頭にサクッと刺さったと・・・」

「はい・・・」

見事に落ち込んでいらっしゃる・・・

しかしそんなカオスな死にかたしたのか俺・・・

「それで、私のミスということで上役から貴方を転生させるようにと・・・」

「転生って普通に輪廻の理論じゃなくて？」

もつともな事を聞いてみますよ？

「はい、一応下っ端とはいえ神が殺してしまったので輪廻から外れてしまったんです・・・」

とてつもなくすまなそうな空気が一気に膨れ上がる・・・

「はぁ・・・つまり何処に転生すると？」

「それは貴方の自由です」

ん？自由？

「というと？」

もちろんわからないので聞くよ？

「つまり別世界、異世界と言えはいいのでしょうか」

異世界・・・

「それって・・・まさか漫画とかの世界って可能？」

俺は一気に目をキラキラさせて質問をする

「あつ、はい一応可能です」

「本当に！本当ですか？！マジのマジで？！」

俺はもう興奮が抑えきれませんよ！！

「本当ですよ、ちなみにチートな能力も付けるように言われましたから・・・」

マジッすか！チートまでもらえるんスカ！！

「で、急ぎで悪いんですが何処の世界に行きたいですか？」

んー・・・やっぱり異世界に行くならば・・・ハーレムは出来れば作りたい・・・あ、別に作らなくてもいいが・・・

あとは魔法が有れば・・・？

それらに合う世界と言えば？

「ネギまー！！」

ああ最後の思考が声に出てしまいました

神様が若干引いてます

「わかりました、転生先はネギまの世界ですね？」

「はい！」

「ではチートはどうしますか？上役の神からお託びとして一つ、私からも一つとなりますが？」

なに?!二つももらえるんスカ!!

それは行幸・・・

「じゃあ・・・一つは魔眼で・・・」

「魔眼・・・ですか・・・？能力は？」

能力・・・能力ねえ・・・

「えーつと・・・じゃあ魔法を解析できたりする感じで（ぶっちゃけ伝○伝です）」

「わかりました、それともう一つで追加しますね」

え・・・？何を？

そんな思いを見切ったかのように言う

「全方位視覚可能な能力です・・・ああちなみにオンオフ可能ですので大丈夫ですよ？」

マジッすか・・・それ最強じゃん・・・

「でもあまり強すぎると世界の修正力が働いてしまうので使用しすぎると一定の冷却時間を作りますね」

いや、それでもマジで最強・・・

「では二つ目はどうしますか？」

二つ目・・・か・・・

「じゃあ俺と契約してください」

「契約？パクティオーですか？」

YESっと英語で言うことができましたと返って来る

「では失礼して」

そう言う俺は神様にキスをかましました！

やっ・・・やわらけーーーーー！！！！

ちなみにファーストキスはレモンの味と言いますが嘘ですね、何とも分からないいい味がしましたよ！

まあそんなことは置いておいて・・・

「カードは！！」

そうやはりカードですよ効果ですよ！

何よりも使えるものでないとかかなり意味が有りません

と言っても・・・

「カード見ただけじゃあ効果湧かんねえよ・・・」

「見せてください」

俺がぼやいてしばらくして神さんが俺に手を出しながら言った

「わかるん？」

俺は投げ捨てるかのようにカードを渡す

「ふむ・・・」

それを上手くキャッチした神様はカードを凝視して動かなくなった

「・・・」

「・・・」

沈黙だけが周囲を支配する

「・・・」

「・・・」

・・・十分後・・・

「もしもし？」

「うにゃ？」

なんか全然反応が無いのでちよつと声をかけてみると・・・

何とも寝惚けたような・・・何というか、間抜けな声が返ってきました

「で、どういう効果だったんですか？」

「いえ、これは・・・」

んー迷っていらっしゃる・・・

「・・・とツとにかく行ってください！！！！」

「えちよつま！」

それが俺の最後の言葉だった・・・

1話テンプレによるテンプレなテンプレ（後書き）

んー上手く掛けてる気がしない・・・

2話（前書き）

時間的に結構進んでいます

2話

「兄さん待ってー」

俺が湖に向かってしていると後ろからネギが追いかけて来る

「なんだ、付いてきたのか」

今は全てが凍える冬、特に此処は山奥に近いのでかなり冷える

「お前はまだ魔力運用が微妙なんだから寒いだろう」

そう、俺はネギの兄として転生した

どうやら時期的には村襲撃前らしい

「だって、兄さんの魔法がみたいんだもん」

そう、俺は湖に魔法の試し打ちに向かっている

「んな、見て楽しいものでもないだろうに・・・」

俺が呆れて言うと

「クチンッ！」

可愛いくしゃみをしてくれやがった

「はぁ・・・」

仕方が無いので俺は自分が来ていたコートでネギにかぶせる

「に・・・兄さんが凍えちゃうよ！」

いっちょまえに心配してきやがる

「お前がもう少し魔力運用上達したら俺も凍えないさ」

俺はそう言うのと湖に向かう

ザクッザクッザクッ

俺が雪を踏みしめる音に続いてネギも俺の足跡をたどって付いて来る

しばらく歩くと水面の凍った湖が目の前に広がる

「真っ白だね、兄さん」

凍った水面の上には雪が降り積りまるで真っ白のキャンパスのようだ

「そうだな・・・」

俺はそう言うのとネギの方を向き

「バリエース・デフレクシオ」

小さな杖を取りだして防御の魔法をかけてやる

「ありがとう兄さん」

「まあ危ないかもしれないからな」

そう言う俺は湖に向き直り

「おお、大地よ空よ全て焼き尽くされ等しく無に帰せ・・・燃える
天地！！」

俺がそう言い杖を前に出すと

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオン！！

赤黒い炎が一気にキャンバスへと向かって行きそのキャンバスをぶち破る

ザアアアアアアアアアア

水柱のように上がった水が降り注ぐ

「つつつめたあ！！」

当然のごとく俺はその水を全身に浴びた

「にっ、兄さん?!」

ネギは障壁を張ってあるので水は被らない

え？普通の水は障壁を通るんじゃないかって？

魔術式をちょっと変えるだけで防げるのだよ

「あー、いや・・・成功・・・かな？」

ずぶぬれになりながら俺は開発した魔法の破壊威力に満足していた
視線の先にはぽっかりと大きな穴がキャンバスに開いて湖の水面が
見えていた

「よし、帰るかネギ！」

俺はネギを抱き上げて軽く地面を蹴る

フワァ・・・

俺とネギは一緒に空へとゆっくりと舞い上がる

「うわぁ・・・」

地上から20メートル当たりで上昇をやめて村の方へと進んでゆく

「兄さん！森が綺麗だよ！」

ネギが指さす方向を見ると木々が砂糖を振りかけられたかのように
白に染まっていた

「ああ・・・綺麗だな・・・」

「姉さん居るかー？」

ネギを抱えたまま俺は喫茶店に来た

「アルジェやはり先ほどの爆音は貴様か！」

うわー厄介なのが居た・・・

「ああそうだよスタン爺」

「もう少し迷惑というものを考えろ！」

ああ・・・始まりました・・・スタン爺のお説教

俺はネギを下ろして姉さんのところに行くように言いスタン爺の話をのらりくらりと聞いていた

カロンカロン

スタン爺のお説教が終わり帰路に付く時にふと何を思ったのかネギが質問をしてきた

「ねえ、お父さんってどんな人だったの？」

「そうねー、貴方のお父さんはね・・・とっても有名な英雄・・・スーパーマンみたいな人だったのよ」

「スーパーマン？」

「そうよ、ピンチになったら何処からともなく現れて必ず助けてくれるの」

「へー、スーパーマンかっこいいなあ」

「じゃあネカネお姉ちゃんも助けてもらったことあるの？」

「フッフ、それは秘密よ」

「じゃが、奴は死んだ。散々無茶やった拳句にお前と兄さんをほったらかしてな・・・馬鹿なやつじゃよ・・・」

「スタン爺・・・そんな言い方は無いだろう・・・」

「ねえ・・・死んだって？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「もう会えないって事だよネギ・・・」

「もう会えないってどーゆーこと？お父さんどこか遠くへ引っ越しちゃったの？」

「・・・そうね・・・遠い遠い国へ行ってしまったの・・・『死んだ』というのはそう言うことよ・・・」

「じゃあさじゃあさ、もし僕がピンチになったらお父さんは来てくれるの？」

「う・・・うーん・・・そうねえ・・・」

「はぁ・・・あなたバカねー死んだ人には二度と会えないのよ。サ

ウザントマスターの子供なのにそんなこともわからないのかしら？」

「やあ、アーニャ」

「アーニャちゃんこんにちは」

「アルジェントさんとネカネさんこんにちは！」

「そ・・・そんなこと無いもん！」

「おや？ネギ？」

「お父さんは来てくれるもん！」

「あなた本当にバカね！『死ぬ』のイミわかってないんでしょう？」

「ほらほら、二人とも喧嘩はダメよ？」

見かねたネカネ姉さんが二人を止める

「そうね、今日はそんな事言いに来たんじゃなかったわ・・・」

そう言うときアーニャは懷をこそごとやって

「ハイコレ、あなたにあげるわネギ」

「えっ、これは？」

「初心者用の練習杖、あんたも来年から学校に来るんでしょ？生きてた頃のお父さん見たくなりたかったら、ちよっとは練習しておい

たら？」

そう言うたアーニャは走って行った

「よかったなネギ、これでお前も魔法の練習が出来るわけだ」

じつと杖を見つめるネギに声をかける

「うん・・・」

しかしネギは何かを考えているようだった

2話（後書き）

うん、ほぼ原作どおりですね^^

此処からどうしよう・・・

3話（前書き）

初の戦闘シーン？

3話

ネギがアーニヤから杖をもらってから数日後・・・

「まったく、ナギの奴には苦勞かけられっぱなしじゃったわい！あいつさえいなけりゃワシもこの村も、もちっと平和じゃったものを・・・」

「スタンさん飲みすぎじゃないかい？」

マスターの忠告も聞かずにスタン爺は酒を煽り続ける

「もう・・・スタンさんったらまた・・・」

「ねえ、お父さんは悪い人だったの？」

そんなネギの素朴な質問にどうこたえるか迷っていると・・・

「ああ、悪がきじゃったわい」

酔っぱらった爺が・・・

「あいつのしでかした騒ぎの後始末が何度あったか・・・村が巻き込まれた事もあったしな」

じ・・・爺・・・

「あいつが死んじまってせいせいしとるわい」

最後のその一言を聞いたネギはどこかへと走って行ってしまった

「爺・・・その言い方はねえだろ・・・」

本当は後を追うべきなのだろうが・・・

あいにくながら慰めるのは苦手なので予先を爺に向ける

「ひっく、本当の事じゃわい」

「・・・」

そう言われてしまうと会った事もない俺には何も言えなくなってしまう・・・

「じゃあまた一ヶ月後な」

「元気にしてるのよネギ」

「うん」

「練習しなさいよ？ネギ！」

俺とネカネ、アーニヤは揃ってバスに乗り魔法学園へと向かう

本当は俺は残ってやりたかったがスタン爺が猛反発して行かざるをえなくなった

「なに?!」

それから一ヶ月ぐらい立ったところ、学園に手紙が来た

『ネギが熱をだした、さすがに付きっきりで看病できんのでちょっとの間帰って来てもらえぬか?』

それを聞いた姉さんは荷物をまとめ始める

そして

「バスの時間は!」

いや、今からバスって・・・てかこの時期雪がひどくて無いって・・・

「姉さん俺も行くからこっちに来て?」

そう言う俺は学園に有る一番高い塔に登り始める

「ねえアルジェ?何をするの?」

姉さんの質問をスルーして最上階にあるバルコニーに出る

「手を出して」

そう言う手を出して来る姉さんに自分の手を重ね

「テレポーション」

転移した・・・

その後ネギのところに付いた姉さんは本気で泣いてしまいネギすらも自ら反省し二度としないと誓うことになった

さらに時は過ぎ・・・

運命の時間がやってきた・・・

「久しぶりね・・・ネギは元気にしてるかしら？」

「いつも通りやんちゃやってるんじゃないか？」

休みが取れたので俺と姉さんはネギの様子を見に村に戻ってきた

「ねえ・・・アルジェ・・・あれ何かしら？」

「ん？」

あれは・・・

「まずい！！『風よ、我が声を風に乗せ我が友の元に声を届けよ！』」

簡単な風声魔法で村中に警告を発する

『全員戦闘態勢！悪魔の敵影を視認！全員戦闘態勢！……！』

俺の声が村中に広がる、それと同時に家々から杖を持った人たちが続々と出て来る

「杖よ！」

そう叫ぶとバスのトランクから俺の杖が飛んで来る

「姉さんはネギを探して！」

俺はそう言い悪魔が最初に接触すると思われる地点へと走った

「遅かったか！」

結構全力で走ったにもかかわらず、すでに戦闘は行われていた

『雷よ！幾重にも重なり敵を薙ぎ払え！雷の槍！』

手に現れた雷で作られている槍を一気に投擲する

それは一瞬にして目標の悪魔を打ち抜いた

「さあ俺が相手だ！」

その一撃で俺の存在に気付いた悪魔たちが大挙して押し寄せて来る

『炎よ！その力は全てを焼き尽くす！煉獄の雨！』

俺のオリジナル魔法が発動すると同時

上空に赤黒い炎の矢が出現する

『解放！』

叫ぶと同時にその矢は俺に向かってきていた悪魔どもを貫いていく

『グアアアアアアアアアア』

悪魔の断末魔が聞こえる

さて、ネカネ姉さんはネギを見つげられたかな？

ネカネsid

「はぁ・・・はぁ・・・」

私は今ネギを探して村の中を走り回っていた

「はぁ・・・はぁ・・・何処なの？ネギ！」

私が角を曲がると

「ネカネ！待て！」

後ろから声がかかりました

「スタンさん！」

「ネギを探しておるのか？」

「ええ、そうなんです・・・」

「たしか奴は釣りに出かけたはずじゃが・・・」

「ネカネおねえちゃん！おじさん！」

「む・・・」

「この声は・・・」

私たちはその声ができる方に向け出す

ゴオオオオオオオオン

ガガアアアアアン

先ほど声のした方からすざましい魔力が弾けている

「この魔力は・・・まさか・・・奴か？」

どうやらスタンさんは魔力の主の見当が付いているようです

「ぬ?! あれは!!」

「いけない!!」

角を曲がったその先には上級悪魔とネギ・・・そして上級悪魔は攻撃の為か口を大きく開いている

「ぬううう」

「まにあって!!」

私とスタンさんはネギの前に飛び込み

『レジスト!!』

とっさに石化の魔法だとわかった私たちはレジストをした・・・が・

・

「ぐむ・・・」

「う・・・」

とっさだったので完璧ではなかったようだった

「うあああ!!」

足に石化を食らった私は耐えきれずに足が崩れその痛みで気を失ってしまいました・・・

ネカネsid END

「ぐ．．．うう．．．」

さすがにこの数は無理だったか？

俺は今大量の悪魔に囲まれてかなりやばい状況だ

「キシヤキシヤキシヤ」

魔力が尽きた俺は立っているのがやっとで杖を杖にしてかろうじて立っている

「終わりだー！！！」

悪役が良く言うセリフを聞きながら俺は死んだ．．．

3話（後書き）

いきなり死にました！

三話目にして死にました！

終わりじゃないです！続きます！

あー何で石化じゃないかって？作品上の都合です！

2011／09／28追記

テレポーションはオリジナル魔法です

効果はテレポーターションと同じです（え？同じだって？）

まあ略してきな感じなんです、指摘があったので始めて使う此処でオリジナル魔法だと追記しておきます

4話（前書き）

再び

4話

「むう・・・」

俺は再び悩んでいた

「なぜにまた此処なんだ？」

そう、此処は転生する前に来た神様とあった場所

そして此処に来てからすでにかなりの時間が過ぎている

「おーい、かーみーさーまー？」

叫んでみるもむなしく響くだけだ

「むう・・・」

やはり、転生させてもらったのに死んだのがいけなかったのか？

まさか・・・これは罰?!

「嫌だあああああああああああああああ!?!」

「何が嫌なんです？」

「ほえ？」

俺が叫ぶと同時に背後から声かけられる

「この声は!!!!」

俺は勢い良く振り向く・・・するとそこには・・・

「お久しぶり・・・と、言えはいんでしょうか？」

あ、やべ・・・ちょっと怒ってる？

「お・・・お久・・・久しぶり・・・」

俺がそう言っていると神様が短く嘆息します

「まったく、何であなたは死ぬんですか？まだ少ししか生きてないというのに」

いや・・・一応5年ぐらい生きました・・・

「一応前世で生きるはずだった寿命までは生きなければならぬので再び戻っていただきます」

「ふええ?!」

「ちょうど周りに人が居なかったのであなたの肉体も回収しましたし」

そう言って手を打つとなんか大きな試験管に水漬けになった転生後の体

「裸ああああああアアアアアアアアアアアア?！」

はい、裸でした

「見ないでええええええええええええええええええええええ?！」

見てほしくないっす・・・特に・・・ピーなところは(当然だ)

「さて、あなたを再び戻すのはいいのですが・・・何時何処に戻すか・・・が、問題です」

「何時何処・・・か・・・」

俺は再び悩みます、まあ襲撃後に戻ってもいいかもしれませんが

けどそうすると結構厄介なんですよ・・・

学校に通ってゝ云々が

だとすると?

「じゃあ大戦中に転生ってできます?」

ナギ達に会ってみたいなあ・・・ってのが本音です

「できますよ?」

「マジッすか!?!」

驚きまました、自分で言っておきながら・・・

「じゃあちょっと細かい設定もお願いできます?」

そう言うとおまけですよ?」と言って了承してくれた

「わーい!」

そう言った俺は自分の設定を考え始める

出来れば男・・・ん・・・いや、女でもいいかもしれない・・・
でも・・・?

「男と女をチャンジ出来る事ってできる?」

「できますよ? 変わるときにちょっとグロテスクになりますが」

笑顔で言われました

「じゃあもう一つ、このカードの能力を教えてください」

そう言って俺は5年間大事にしまっていたパクティオーカードを出す

「使って無かったんですか?」

「まあわからない力は使わない主義で・・・」

そういうと仕方が無いですね、とまた嘆息された

「このカードの能力は創造です」

「創造・・・？」

「ええ創造、考えた物を作りだす事が出来るんです」

考えた物を・・・作り出す事が・・・でき・・・る？

「チートじゃん！」

「元からあなたの力はほぼすべてチートですよ？」

突っ込まれた・・・

「それと、今あなたの心をちよつとのぞいてみましたが・・・サウザントマスターと会いたいのですか？」

「まあ・・・英雄ですから？」

「ふむ・・・」

神様が長考に入られました！

なんて思っていると・・・

「わかりました、さすがに未来を見せてはいけないのでなるべく女でいてくださいね？」

「わかりました」

「ああ後、女と男両方の時女なら女の一般常識、男なら男の一般常識が浮き上がるのでそれなりに性別の羞恥心が有ります、女で男性

のピーなんて思い浮かべない様にして下さいね？その逆もしかりですよ？」

釘を刺されました！

「では行つてらっしゃい」

神様の言葉を最後に俺の意識は闇に落ちた

4話（後書き）

結構神様おおざっぱですね・・・

とにかく大戦中に飛びます！

5話（前書き）

えちよ！！

5話

ズン・・・・ズズン！

一体此処は何処だと思いますか？

ドゴオオオオオオオオ

お察しの通り戦場！でございます

「なんでこんな所にいいいいいいいいいい」

思わず叫んでしまいました……。はしたない事を……

ただいま現在の女で戦場のど真ん中に居ます

いやーなんか左から兵士、右からも兵士……挟み撃ちにされましたよ？

「死ねえええええ！」

わあ……斬りかかってきたー

「雷斬り！！」

私は魔力を手に貯めて雷に変換したもので一気に切り裂きます

「がああああ！！」

難なく真っ二つになりました

「素顔は・・・不味いな・・・」

そう思った私は

「アデアット！」

カードが光り輝き一冊の分厚い本になりました

「お面お面・・・」

俺がそう考えていると

「・・・」

狐のお面が・・・出てきました・・・

とりあえずそれを顔にかぶせて・・・

『闇の指輪』

そう言うとな本当に黒い指輪が！しかも設定も考えていたのでそれも付いているハズ！

『闇よ・・・在れ！！！！』

指輪をした手に魔力を込めて振ると黒い狼が大量に出現

『くらいつくせ！』

そして私の命令通りに両軍を駆逐し始める

当たりが悲鳴だけになった時・・・一つのバグが紛れ込んだ

「なんだ、なんだあこりゃあ・・・」

長い杖を肩にかついだ赤毛のバカが来ました

「なんだ、バカですか・・・」

「ちょ！確かに俺は中退だが！」

「それをバカと言わずして誰がバカになるんですか？」

さらに上空からキザッたらしい男が・・・

「なんですか・・・今度は変態ですか・・・？」

「それは言えてるな」

お次は刀を持った男

「ヘタレ・・・」

「斬岩剣！！！！」

ガアアアアン

「いきなり切りかかって来るとか何事ですか」

自分が暴言を吐いたのを棚に上げて抗議してみますよ？

「ほらほら詠春女性に失礼ですよ？ 出会っていきなり切りかかるとか」

アルビレオがなんとかなだめています

「で、あんたは敵か？ 味方か？」

単刀直入にナギが聞いてきます、さすがバカ

「敵・・・って言ったらどうします？」

「もちろん潰す」

「ふむ・・・」

私は態と考えるそぶりをする

「敵ではないですが・・・戦いたいですね・・・あなたと」

私はそう言いながら殺気と魔力を一気に膨れ上がらせる

「おおおお、餓鬼のくせにすげえ殺気だな・・・やるか？」

「では、こちらから」

私は面を外しつつ左の魔眼を起動

左目から火が噴き出す

「魔眼持ち・・・魔族か？」

「いいえ、人間ですよ？」

私は律義に返すと魔法を唱える

『集え風よ、集え水よ、大気は集まり水の刃を・・・氷矢!』

一気に貯め無しで百以上の氷の矢を作りだしナギに向かって放つ

「おうおう、すごえなあ!!」

ナギは難なく避け、避け切れない物を杖に魔法を付与して叩きつぶす

『創造―斬鉄剣!』

アーティファクトを変形させて耳飾りにし、その途中で刀を作ります

「いきますよ？」

「来い！」

刀を構えて声をかけると威勢よく返して来る

「っふ!!」

一回の瞬動でナギの背後に回る

「おおお?!」

それでも余裕そうだ

『創造―千華刀』

さらに刀を追加する、しかし今度の刀は

「はぁ!!」

横に一気に振る

キイイイイイイイン

鉄をこするような音と共に刃が分裂して飛んでゆく

「うおおおおおおお?!」

それでも軽々と避けて行く

「だったら・・・『来たれ、虚空の雷、薙ぎ払え・・・雷の斧!!』」

手に収束した雷を一気にナギへと振り下す

『来たれ虚空の雷薙ぎ払え雷の斧』

ガアアアアン

魔力と魔力がぶつかり合う

「やるなあ餓鬼のくせに！」

「餓鬼餓鬼五月蠅いですよ！何より女性に失礼です！」

『『来れ雷精風の精雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐雷の暴風！！！』』

同時に放たれた魔法が再びぶつかり合う

「ぬおオオオオオオ！！」

「キヤアアアアアア！！！」

爆風がすぎまじくて私は体を吹き飛ばされ・・・？

「何やってるですか・・・」

事は無く、ナギが後ろから抱きとめていました

「何やってるって・・・助けたんだが？」

ブチッ

「放せ！！！！」

バシン！

「ぐはぁ！」

捻りを利かせた平手が難なくナギの顔に入る

「あるぷろれらぁぁ！！」

なんのわけのわからぬ声を出しながら地面を転がっていく

「ナギダメですよ？女性をもっと丁寧に扱わないと」

そう言いながらアルビレオと詠春がこちらにやって来る

「いてててて・・・だから飛ばされたときに受け止めたんだろうが・・・」

何事もなかった・・・とまでは行かずに頬をさすりながら戻って来るナギ

それでもって何で私はこれ以上戦わないかという・・・

「何をしたんですかバカ！」

魔法が使えません・・・

「ああ・・・残念だが魔法はしばらく使えないぜ？」

そう言いながら私を立たせる

「ちょっと珍しい魔法具が手に入ってな、実験させてもらった」

そう言いながら何やらペンみたいな物を出す

「つく！」

とっさにそれを奪い握りつぶす

「ああああ！！！！」

当然です

「ちょ、それ！！」

「ふん！」

「で、どうするんです？ナギ」

「どーいうこった？アル」

「どーいうことって・・・彼女の事ですよ、魔法をあなたが封じてしまったんですこんな所に放りだしたら・・・よくて戦死、ですかね・・・」

「でしょうね」

ヘタレが肯定しやりました

「ん・・・？魔法を封じた・・・？」

私は一つの言葉に考える

あれ？此処に来る前に言われなかったっけ？

服は現地の物をすぐに調達するようにと・・・

「ッ！まさか！」

「どうしました？」

アルビレオが些細な変化に気付く

「やっ！こっち見るな！！！」

私は体を隠すために蹲る

「おやおや、こんな所でストリ「違うわ！！！」じゃあなぜ？」

「魔力で編んだ服なの！魔力がなかったら維持できないに決まっているでしょう！」

そう叫ぶと同時に

ガアアアアアアン

私たちの傍に砲弾が降って来ました

・ その衝撃に魔力の封じられた私は意識を暗闇へと落として行った・・・

5話（後書き）

主人公ピーーーーーンチ！

アーティーフアクトの設定はちょっとオリジナルです

まあアスナのアーティーフアクトみたいに本気になったらー云々的に
思ってもらえれば・・・

6話（前書き）

別視点スタート

6話

アルビレオsid

帝国と連合が衝突しているそんな中

ちょうど中心あたりに大きな魔力の塊が出現した

「なんだああ？」

ナギもそれに気付いたようです

「まあこちらの兵器か・・・あちらの兵器か・・・」

「まあどの道やばかったら俺らにお鉢が回って来るだろ」

そう言いながらのんびりとしているナギ

詠春は軍の司令部に居る

「しかし姫子ちゃんどうすつか・・・」

姫子ちゃん・・・此処はあの子の事を言っているんでしょうね・

「おや？」

詠春が戻ってきましたよ？

「ナギ、アル上からの命令が来た突如出現した謎の魔力反応を無効化しろ、だど」

謎・・・ですか・・・

「りょーかい、じゃあ行きますか！」

そう言い私たちは前線へと向かった

「すごいですねえ・・・」

はつきり言うとは悲惨と言うべきほうが正しいのかもしれない

何か影のような狼の姿をしたものが両軍の兵士を食らっている

「オラオラオラー！」

ナギはいつものようにバカでかい魔力を使ってなぎたおして行く

「まあ私は楽が出来ていいのですが・・・」

そう言いながらその影が現れ続けている先を見つめる

「どうやら、面白い事になっているようですね・・・」

ナギと詠春にまかせて私は楽ですし

「働いてください！アル！」

おっと詠春に言われてしまいました・・・

私も働きますか・・・

そうして重力球を使って倒して行く

そして後100mぐらいというところで影が全て消え去った

「おや・・・」

驚いて足を止めるとどうやらあの影達の主がこちらを見据えている
流れるように長い金色の髪をしている・・・

「なんだ、あいつは・・・狐の面など被って・・・」

詠春は分かっているようですが・・・

かなり異質な・・・それでいてかなり純度の高い魔力を持っている
ようです・・・

するとナギが先行して近づいていきました

「なんだ、なんだこりゃあ・・・」

ナギが話しかけようとしているのかわからないが・・・話しかけて
いる事にしよう・・・

「なんだ、バカですか・・・」

「ちょ！確かに俺は中退だが！」

「それをバカと言わずして誰が馬鹿になるんです？」

あ、思わず悪口癖が・・・

「なんですか・・・今度は変態ですか・・・？」

むう・・・

「それは言ってるな」

詠春が来ると

「ヘタレ・・・」

つぶ・・・確かにそうですね

「斬岩剣！！！」

ガアアアアン

詠春が珍しく怒りましたよ

「いきなり切りかかって来るとか何事ですか」

おやおや、暴言を吐いたのに棚上げですか・・・

「ほらほら詠春女性に失礼ですよ？出会っていきなり切りかかるとか」

そう言って詠春を注意していると

「で、あんたは敵か？味方か？」

ナギが単刀直入に聞きました

「敵・・・って言ったらどうします?」

予想外の回答に

「もちろん潰す」

躊躇なく答えましたよ

「ふむ・・・」

何かを考えるそぶりをした彼女は・・・

「敵では無いですが・・・戦いたいですね・・・あなたと」

そう言った瞬間彼女から殺気と魔力が膨れ上がる

「おおおお、餓鬼のくせにすぎえ殺気だな・・・やるか?」

「では、こちらから」

そう言うとき彼女は面を外しました

なんと、幼いながらに美人では無いですか!

「魔眼持ち・・・魔族か?」

「いいえ、人間ですよ?」

しかも魔眼持ち・・・人生の収集してみたいですね、彼女の・・・

そうしてしばらくナギと彼女が戦っているのを眺めていると

「ぬおオオオオオ!!」

「キヤアアアアア!!」

魔法の衝撃で彼女が飛びました・・・いや、飛ばされました

それをナギが受け止めたのですが・・・

「何やってるですか・・・」

「何やってるって・・・助けたんだが？」

「放せ!!!」

バシン!

「ぐはあ!」

捻りを利かせた平手が難なくナギの顔に入りました

「あるぷろれらああ!!」

なんのわけのわからぬ声を出しながら地面を転がっていく

「ナギ、ダメですよ? 女性はもっと丁寧に扱わないと」

そう言いながら私たちは近づいていく

「いててて・・・だから飛ばされたときに受け止めたんだろうが・

・・」

何事もなかった・・・とまでは行かずに頬をさすりながら戻って来るナギ

「何をしたんですかバカ!」

どうやら彼女は混乱しているようです

「ああ・・・残念だが魔法はしばらく使えないぜ?」

そう言いながらナギが彼女を立たせる

「ちょっと珍しい魔法具が手に入ってな、実験させてもらった」

そう言いながら魔法具を出す

「つく!」

それを見せた瞬間目にもとまらぬ速さで彼女がそれを奪い破壊した

「ああああ!!!」

「ちょ、それ!!」

「ふん!」

まあ当然でしょうね・・・

「で、どうするんです？ナギ」

「どーいうこった？アル」

「どーいうことって・・・彼女の事ですよ、魔法をあなたが封じてしまったんですこんな所に放りだしたら・・・よくて戦死ですかね・・・」

「でしょうね」

詠春が赤面せずに珍しく会話に入って来ましたよ

「ん・・・？魔法を封じた・・・？」

彼女が首をかしげる・・・どうしたんでしょう？

「ッ！まさか！」

「どうしました？」

なんか急にうろたえ始めた彼女が気になって来ます

「やっ！こっち見るな！！！」

彼女は体を隠すためか蹲った

「おやおや、こんな所でストリ「違っわ！！！」「じゃあなぜ？」

「魔力で編んだ服なの！魔力がなかったら維持できないに決まっているでしょう！」

そう彼女が叫ぶと同時に

ガアアアアアアン

私たちの傍に砲弾が降って来ました

私たちはとっさに障壁を張りましたが・・・彼女は・・・

飛んできます・・・

「よっと・・・」

それをナギがローブに来るんでキャッチしました

「気絶しちゃったな・・・」

まあ当然でしょう

「で、どうするんですこの子」

「どうでしょう？仲間に入れるというのは」

「何を言っているんだアル？」

詠春が聞いてきますが・・・何を考えているって・・・面白そうとしか思っただけですよ、何も考えていません

「確かにちょうどいいかもな、姫子ちゃんの相手をしてもらおうか」

そんな風に私とナギの判断で彼女を仲間にする事が決定しました

フフフこれからが楽しみですね・・・

アルビレオ s i d E N D

6話（後書き）

アルの雰囲気ってこんな感じ・・・かな？
キャラ粉碎してないといいなあ・・・

7話（前書き）

ビックリとはまさにこの事・・・

7話

「う．．．うう．．．？」

意識が覚醒してゆきます．．．

「おっ目覚めたか．．．？」

そして目を開けると目の前には．．．赤毛のバカ．．．元いナギ．．．

「何してるんですか．．．」

ジト目で見てやる

「いや、起きたんだったら下に来いよ？」

そう言ってナギは出て行きました

「むう．．．」

そして寝ていたベッドから降りて．．．

「っ！」

裸でした．．．二つの可愛い丘が綺麗です．．．

「ってオイ！」

自分に自分で突っ込みつつさて服をどうしようかと思案しているところ

「あーすまん服ー」「いやあああああああああああああああああ
ぐはああああ」

突然入ってきたナギを思いっきりぶん殴ります

「らればぶろぶぽおお」

またもやわけのわからぬ声を出しながら、今度は地面ではなく階段を転がって行きました

「はあ・・・はあ・・・」

魔力が無い状態だと結構キツイものですね・・・

「アデアット・・・」

カードは使えるかなーと思って言ってみると

普通に使えました

『創造ー服ー女物』

と言ったのですが・・・脳内でどう変換されたのでしょうか？

ゴスロリが出てきました・・・

『創造ー服ーワンピース！』

作り直して黒色のワンピースを作る

「あ・・・下着・・・」

失念しました・・・

『創造―服―下着』

下着は年齢相応の物が出てきましたよ？

決して勝負下着的な物はありませんでした、ええ断じて！

「さて・・・と・・・」

服を着終わった私は部屋を出てみました

「おはようございます、レディ」

「おはようです、変態」

「これは辛口ですね・・・」

「ほらナギいい加減に起きなさい」

部屋から出て階段があったので降りて行くとアルビレオと先ほど殴り落としたナギが居ました

「朝食、食べますか？」

「在るなら食べます」

そう言うときアルビレオが台所的なところに行って食器と食べ物をいくつか持ってきました、もちろんその際に転がっているナギを踏みつけてました

「モグモグ・・・」

「それで、そろそろあなたの名前をお聞きたいのですが・・・？」

「モグモグ・・・ん・・・」

名前・・・名前・・・

さすがにアルジェは不味いと思う・・・

たしかアルジェってイタリア語で銀だったよな・・・？

「ギン・・・ギン・インゴット・・・」

「ギンさんですか・・・」

「さん要らない・・・」

「そうですか、では私も改めて・・・アルビレオ・イマ、アルと呼んでください」

「ん・・・」

「おおイテテテ・・・」

「やっと起きましたかナギ・・・」

「んああアル、嬢ちゃんーぐはあ！」

イラっと来たので傍にあったつまようじを投げてみました

「ナギ失礼ですよ、お嬢さんーアテ」

またもやイラっと来たので以下略

「ギン・インゴットが私の名前・・・」

ナギの頭を踏みつけて言う

「ギン・・・な・・・分かったから・・・足をどけて・・・」

さすがに本気で言っているようなのでどいて朝食を再び食べる

「モグモグ・・・」

「で、食事中に悪いんだが何であんなところに居たんだ？」

「もぐ・・・」

口の中のものを飲み込んでから・・・

「確かに悪いわね・・・で、あんなところに居た理由だけ？私もわからないわ、気付いたらそこに居たの」

最後のは嘘だ、出る場所は教えてもらっていた

「気付いたらそこに居た・・・ですか・・・」

「転移ってことか？」

「いえ、転移の魔力は感じられませんでした」

なんか二人が話し始めたので私は食事を再開・・・

「じゃあどうやってあれだけ強くなった？」

と思ったのですが・・・

「・・・必要に迫られたから」

じつとスプーンに乗った食べものを見てから言う

「必要・・・？子供のあなたにそのような必要が？」

「仕方ない・・・私たちは・・・襲われた・・・人間なのに魔眼を持っていたから・・・」

ちなみにこれも嘘、体よく魔眼を使ってでっち上げてみました

「そっか・・・苦労したんだな・・・」

そう言ったナギは私の頭を撫でる

「触るな!!」

私はその手を叩く

「うおお、悪い・・・」

あれーなんか物語ってか悲劇の少女が出来上がってるー？

「苦労したんですね・・・」

アルなんか泣いてるし・・・嘘だろうけど

「というか、あなたに自己紹介してもらって無い・・・」

私はナギの方を見て言う

「あれ？そうだったけ？」

「そう言えばそうですね」

アルにも肯定されたナギは自己紹介を始める

「ナギ・スプリングフィールドだナギでいいぞ」

そう言ってまた私の・・・頭を撫でる

「だから触るなと！」

再び叩く

「悪い悪い、癖でな」

どんな癖だどんな

「で、ギンはどうしたい？」

「どうするって？」

思わずナギを見つめてしまう

「戻る所はあるのか？無いなら俺たちと行かないか？」

戻る所は・・・有るかと思われれば無い

「戻る所は・・・無い・・・」

しかしこのまま行くと本当に悲劇の少女が出来上がっちゃうな・・・

「じゃあどうしますか？」

アルが後押しをして来る

「・・・」

「そうすぐには決められないよな、明日には此処を出るからそれまでに決めてくれ」

そう言ったナギとアルは出て行った

「計画通り・・・なのかな・・・」

なぜか自分の考えている通りに進む・・・しかし、どこか違うところで私の思う通りに進んでいない気がする・・・

7話（後書き）

世界の修正力を微妙に垣間見た時・
・
・

8話（前書き）

別視点・・・

8話

アルsid

「らればぶろぶばおお」

悲鳴の後、わけのわからぬ声を出しながら階段を転がり落ちて来る
ナギ

「グッ」

あ、気絶しましたね

「ナギ？こんな所で寝てはしたないですよ？」

一応声をかけてみるが・・・本当に気絶しているようだ

「はぁ・・・」

「おはようございます、レディ」

「おはようです、変態」

「これは辛口ですね・・・」

昨日助けた？少女が下りてきた

おや？用意しておいた服とは違う物を召していますね・・・どうい
うことでしょうか？

「ほらナギいい加減に起きなさい」

一応声をかけておきます

「朝食、食べますか？」

「在るなら食べます」

それなりにお腹が減っているのではないかと思って聞くと、ちよつ
と予想外な回答が・・・在るなら・・・ですか

そう思いつつ台所に行き、食器と食べ物をいくつか持って戻ります

その際に起きないナギを数回踏んで・・・

「モグモグ・・・」

いや、結構可愛いですね・・・

「それで、そろそろあなたの名前をお聞きたいのですが・・・？」

「モグモグ・・・ん・・・」

私が名前を聞くと彼女は少し考え始めました

そうして体感時間で一分立った時

「ギン・・・ギン・インゴット・・・・・・・・」

「ギンさんですか・・・」

「さん要らない・・・」

ギン・・・インゴット・・・

ギンはおそらく銀でしょう、インゴットはインゴット・・・本名じゃなさそうですね

「そうですか、では私も改めて・・・アルビレオ・イマ、アルと呼んでください」

「ん・・・」

彼女が可愛らしく頷きました、ロリコンでは無いのですが・・・な

んかものすごく可愛い気がします・・・

「おおイテテテ・・・」

「やっと起きましたかナギ・・・」

階段から落ちてきたナギが起きましたね・・・

「んああアル、嬢ちゃんーぐはあ！」

あ、再び地面にひれ伏しました

「ナギ・・・失礼ですよ？お嬢さんーアテ」

私もつられて言ってしまいました・・・

その際に正確に額のど真ん中につまようじがサクッと刺さりました

意外と痛いですね・・・

「ギン・インゴットが私の名前・・・」

彼女がナギの頭を踏みつけつつ言います

というか彼女は女王気質があるのでしょうか？

ものすごく様になってますね

「ギン・・・な・・・分かったから・・・足をどけて・・・」

おや、足を乗せてるだけなのかと思ったらそれなりの力をこめて踏みつけていたようですね

「モグモグ・・・」

「で、食事中に悪いんだがなんであんなところに居たんだ？」

「もぐ・・・」

ナギが聞きますが・・・

「確かに悪いわね・・・で、あんなところに居た理由だけ？私もわからないわ、気付いたらそこに居たの」

「気付いたらそこに居た・・・ですか・・・」

「転移ってことか？」

ナギが予想できる事を言います・・・が・・・

「いえ、転移の魔力は感じられませんでした」

だとすればどうやって現れたのでしょうか・・・

なんか自分で行って謎を深めただけのような気がします・・・

「それに、彼女の魔力は急に出現しました・・・転移だったらもう少しゆっくり感じられるはずです」

「だよなあ・・・」

これ以上この件は詰めても解決しなさそうですね・・・

「じゃあどうやってあれだけ強くなった？」

確かにそこも疑問です、5歳ぐらいの少女があれだけの力を持っているのか・・・魔力保有量は基本的に元からなので省きますが・・・

「・・・必要に迫られたか」

口に運ぼうとしたスプーンを戻し彼女が言いました

「必要・・・？子供のあなたにそのような必要が？」

まあこれも当然の・・・というか先ほどと同じ様な質問ですね・・・

「仕方ない・・・私たちは・・・襲われた・・・人間なのに魔眼を持っていたから・・・」

ふむ、確かに魔眼を人間で宿しているのは普通は居ない、移植やハーフなどの場合はありえるが・・・

「そっか・・・苦勞したんだな・・・」

そう言うとなぎはギンの頭を撫で始めました

「触るな！！」

少々叫ぶような感じで彼女がナギの手を叩きました

「うおお、悪い・・・」

「苦労したんですね・・・」

少し心が痛み涙線が・・・

「というか、あなたに自己紹介してもらって無い・・・」

彼女がナギの方を向いて言います

「あれ？そうだったけ？」

「そう言えばそうですね」

確かに出会いがしらも名乗りませんでしたからね

「ナギ・スプリングフィールドだナギでいいぞ」

そう言ってナギは再び彼女の頭を撫でる

さっき触るなと言われたでしょうに・・・

「だから触るなよ！」

ほら・・・

「悪い悪い、癖でな」

あなたにそんな癖無いでしょう・・・

「で、ギンはどうしたい？」

「どうするって？」

予想外の質問だったのかナギを見つめる彼女

「戻る所はあるのか？無いなら俺たちと行かないか？」

そう、そこが問題だ

彼女は力を持っている、魔眼という力以外にもかなり桁はずれなもの

「戻る所は・・・無い・・・」

もしかしたら彼女の力を悪用しようとする奴が出て来るかもしれない

私たちだったら・・・まあ悪い方向には行かないはずだ・・・

「じゃあどうしますか？」

「・・・」

「そうすぐには決められないよな、明日には此処を出るからそれまでには決めてくれ」

ナギがそう言い私に目配せをしました

私は目で返事をし共に部屋をでます

途中扉の隙間から見ますが、天井を見つめながら考える彼女は年相
応に見えなかった・・・

8話（後書き）

あれ？なんかアル視点が多い・・・困った・・・

しかも詠春どこいったW

9話（前書き）

ラカン来る――

9 話

コンコン・・・コンコン・・・

扉をノックする音がする

「ギン起きましたか？」

アルの音がする・・・

「ん・・・んん・・・」

私は横たわっている体を起こし扉へと向かいます

「おはようです、アル」

「おはようギン、朝食の用意が出来てますから着替えて降りてきてください」

そういうとアルは下に降りて行った

私は部屋に戻り

「アベアット」

イヤリング状態にしてあるアーティーフアクトを出します

それを耳につけて・・・

『創造―服―戦闘用計装備』

光が私の体に集まり始め動きやすく、かつ防御性に優れた服が現れる

「・・・胸が・・・苦しい・・・」

病気では無いですよ？締め付けられてるだけです

『創造―服―部分改善』

さらに言うと胸の圧迫感が取れました

意識的に男の服を作っていたようです

「おはようギン」

「おはようナギ」

下に降りるとすでにナギが座っていた

そして私がその向いに座ると

「さあさあ食べましょうか」

・
そう言いながら詠春とアルが料理の入った食器を持ってきました・・

ちなみにアルは魔法で食器を浮かせています

『いただきます』

全員でハモって・・・

「ガツガツガツガツ!!」

『モグモグモグ・・・』

一人だけかつ込み始めましたよ・・・

「はしたない・・・」

私は咀嚼を終え飲み込んでからナギに文句を言います・・・あ、なんか汁が飛んだ・・・

「そうですね、ちょっと行儀が悪いですね・・・」

アルも賛同してくれます

「いふおいへくふあふあいふおじふあんふあないふお」

もはや何を言っているのかわかりません

「物を飲み込んでから話せ!!」

おお詠春の突っ込み! レアですよ!

「ん、モグモグモグモグ・・・ゴクン」

ん、急いで嚙んで飲み込みましたね・・・

「で、ギン・・・お前はどすする?」

「ああ、そうですね忘れてました」

驚いたように言う・・・本当に忘れてたんですね・・・アル・・・

「決めました、貴方達に付いていきます」

そう、私は覚悟を決めました

私が介入することによって変わるであろうこの世界の物語

私が行うであろうことを元に戻そうとするであろう世界の修正力と
戦う事

ネギを・・・未来の自分・・・いや、居ないかもしれない・・・で
も助けようと思う・・・

私たちは今宿を出て歩いています

別にこの世界には竜とか空飛ぶホニャララとかがあるんだからそれを使えば・・・と思うんですが・・・荷物を持つ竜しかいません

アル曰く

「移動用のものと食費が馬鹿にならないんですよ、空飛ぶホニャララだと燃料が同じようにバカにならないんです、だからダメです」

笑顔で言われました

んー・・・魔法具で何とかしちやおうかな・・・？

そう思いながらイヤリングに触れるんですが・・・

「ギン、それ使うなよ？」

ナギに見抜かれています・・・

物を作るといふ力はばれてはいませんが・・・強力な魔法具という事はばれています・・・

「わかりましたよ！歩けばいいのでしよう！歩けば！」

もう半分やけです・・・

それから二週間ぐらい立ったでしょうか？

途中別行動をしていたナギの師匠ことゼクトと合流

さらにゼクトに私が極端な魔法しか使えないのが発覚

怒られて魔法を道中教えるということになりました

・・・ゼクト厳しすぎです・・・

そして今夕餉を作って十食べています

「んっふっふっこいつか旧世界は日本のなべ料理ってやつか！」

そう言いながらナギは肉を次々と投入して行きます

「こら！ナギ！何肉を先に入れてるんだよ！」

詠春が騒ぎます、そんなさなかにゼクトがトカゲ肉でもいけるのか
と言っていますが全員でスルー

「いいじゃねえか上手いもんから先でよ、ホイホイ」

次々と肉が鍋の中に・・・

「バツバカ！火の通る時間差というものがな！」

「あーうっせーうっせーぞ！えーしゅん！！」

ああなんかカオスです・・・

「フフ・・・詠春知っていますよ？日本では貴方のような者を・・・

鍋將軍！

と呼びならわすそうですね」

『ナベ・ショーグン！？』

ゼクトとナギがショック？というか驚いています

「わかったよ・・・俺の負けだ・・・今日からお前は鍋將軍だ」

「うむ、好きにするがよい全てお前に任せる」

そんな風に平和に食事が・・・

ズガアアアアアアアン

「鍋があああああああああああ！！！！」

鍋があつたところに大剣が飛んできました

ちなみにすでにゆであがっている肉はアル、ゼクト、ナギの三名に
全て捕食されました

「食事中失礼~~~~っ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜ！」

「なんじゃあのバカは・・・」

「帝国のって訳じゃなさそうだな・・・」

に・・・肉・・・鍋・・・

「えいしゅ・・・むおおお？！」

私の視線の先にはひっくり返った鍋を被った詠春さん・・・

「フフ・・・フフフフフ・・・フ・・・食べ物や粗末にするものは・・・」

「私の・・・肉・・・鍋・・・」

「どーしたー来ねーのかぁー！ー？来ねーならこっちから・・・」

ザンッ

「斬る」

「死ね・・・」

私と詠春さんは一瞬でラカンに接近

ラカンが持っていた剣は詠春さんがぶった切りました

「ちょ・・・ちよったんま！マジで強いな！ちょいまたね？」

「ふざけるな！やる気なら本気を出せ！！」

「どーでもいいです、私の食事を邪魔するなら死になさい！」

「っへ・・・そーすか・・・じゃあこっちも・・・裏ワザを・・・」

そう言った瞬間ラカンが葉のカプセル的な物を投げてきました

ボンボン

そして煙が出たと思ったら・・・

「つぶ!!」

あー詠春さんの弱点お色気ですか・・・

あつ、頭にタヌキの置物落とされて潰れた・・・

「関係ないです・・・!!」

私はアーティーファクトで作りだした刀を二本振りまわしながらラカンを追いつめていく

「つちよ、あんた誰だ!!」

当然ですね、つい最近仲間になったばかりです、知らなくて当然です

「誰でしょう・・・ねっ!!」

体の回転を利用して剣を横に薙ぐ

ゴッ・・・バガアアアアアン

せり出していた岩が斬れました

「オイオイオイ、でたらめじゃねーか!!」

「知りませんよ！ええい！食べ物の怨み！！！」

『創造―奥義―桜』

私がそう言うのと体を桜の花びらが多い始める

「なんだなんだなんだあ？！」

ついに私の体は桜で遮られて見えなくなる

そうして桜の花びらが周囲に散って行く

「ああ？何処だ？」

そこには私は居ない

「此処ですよ？」

そうしてラカンの背後にある桜の花びらが急に私になる

「うおおおお」

「死ねと言っています！！！！『奥義―桜花斬！！』」

「気合い防御！！」

ギャリリリリリリリリ

刀が何かにさえぎられてこすれる音がする

「本当にでたらめな奴ですね貴方は!!」

「なんだなんだ？俺の事を知っているのか？」

「知っているようで知りませんよ!!」

あらん限りの力で刀を振りぬく

ギイイイイン

「ん？」

嫌な音がしたと思って見てみると

「折れてるーーーーー!!」

はい、折れてました刀

「くううう・・・本気で殺す・・・!!」

『創造―殺戮の糸』

そう言った瞬間深紅のピアノ線が私を取り巻く

「死ねやああああ!!」

そうしてそれを魔力で操りラカンへと振るう

「っふん!!」

だがしかしラカンの拳の風圧によって起動がずらされる

「嬢ちゃん強いな・・・だが、細部が甘いぞ？」

「っな!!」

ありえないことだらけに驚愕していると懐に入られていました

「っはあああ!!」

「っぐ！」

下からのアッパー！

「オラあああ!!」

障壁を無視して貫通して来るとかー

バグめ！ー

9 話（後書き）

強すぎな設定でしょうかね？ラカン・・・
詠春のやられ方って今思うとダサいですね・・・

10話(前書き)

ラカンつええ・・・

10話

ナギ s i d

食事中に勝負を仕掛けてきたバカが詠春とギンに攻撃されている

「いやぁ・・・何時見てもギンは規格外だな・・・」

大人びた発言が多いせいかな、彼女が5、6歳だということを忘れてしまおう

あれ?というか・・・彼女の年齢聞いて無くな?

「ナギ?ダメですよ女性に失礼な事を聞いては」

なんでお前は心を読めるかな・・・?

「顔に出やすいんですよ、あなたは・・・」

さいですか・・・

ゴッ・・・バガアアアアン

おお・・・大きな岩が・・・

そう思っていると

「何だ・・・?あれ・・・」

ピンク色の花びらがギンの体を包んで行く・・・

そして花びらが散るとそこにはギンの姿が無かった

「おいおい、なんだよあれ・・・」

「あの花びらは旧世界は日本の桜という植物の花びらですね、しかしあの技・・・魔力を一切感じませんでした・・・こういう原理なのではないですね・・・」

理論的な事に詳しいアルにすらかからない魔法を使うギン・・・

「お前は・・・誰なんだ・・・」

それでいてなぜか親近感の湧く魔力を持つギン・・・

「お前は・・・」

「っ！いけない！！」

アルの声に思考を中断してギンを見る・・・

「っ！ギン！！」

そこにはアッパーを食らって空に舞うギンが居た

ギンの張っている障壁はかなり規格外なはずなんだが・・・

それを貫通する奴・・・ジャックと言ったか？

「本当に何者だよ・・・」

そう言いながら俺は瞬動でギンを受け止めに行く

「おう、出たな情報その4―赤毛の魔法使いは弱点無し―特徴、無敵！」

なんか言っているな・・・

「おい、お前ら・・・手出すなよ！」

「言われずとも」

「馬鹿の相手は馬鹿にさせるのが一番じゃ・・・」

簡易転移でギンをアルに渡してから向かい合う

「奇遇だな小僧、俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ」

「っへ、おっさん良いのかよ？ 剣無しで」

「心配すんな、俺はすでの方が強え」

「っは！」

「フン・・・」

互いに魔力と殺気をぶつけ合う

ッゴ！

動いたのは二人とも同時だった

「ぐお！」

「っは！」

物質量的にキツイな・・・

クロスカウンターをお互いに食らって俺は飛ばされる

「っへ！」

だったら数で！

そう思いながら分身をして襲いかかる

「うおっ！たくさん？！忍者かよ！・・・・あーっと・・・・めん
どくせえ！」

ドッ！！

奴が手をしたから上に振った瞬間、衝撃波があたり一面を吹き飛ばす

だが俺はそこには居ない・・・

『百重千重と重なりて走れよ稲妻―

「大呪文か！」

―千の雷！！』

『気合い防御!』

っ
ち防がれたか―

「まだまだいくぜええ!」

「こいやあああ!」

そうして戦いは延々と続いた―

13時間後―

「フ．．．フフ．．．やるじゃねえか．．．小僧．．．」

「あんたこそな」

お互い魔力を消耗しきって動けない状況に．．．

「いや、四対一で挑んでおいてこのざまじゃあ俺の完敗か．．．」

「俺は．．．俺に並ぶ人間が増えただけで満足だぜ．．．」

そう言っていると詠春が俺を背負う

「コラてねえ・・・ナギ・スプリングフィールド！リベンジすんぞ！必ず決着つけるからなあ！」

「おおーいつでもこいやあ！筋肉ダルマア・・・戦争やってるよりきがはれらあな！」

何やらぶつくさゼクトが言っているが無視！

そうしてしばらく詠春に背負ってもらっていたんだが・・・

「アル、ギンのやつ平気か？」

「ええ・・・大きな怪我は無かったですよ？あれだけのアッパーを食らったにも関わらずほぼ無傷です」

「ふむ・・・」

「もろ直撃したように見えたんだがお・・・」

詠春は気絶していたので以下略

「まあ！無事ならそれでいいんだ！」

そうそう、皆健康が一番なのさ！

まあそんな考えはお気楽なのかもしれないが・・・

ナギsid END

10話（後書き）

詠春出番すくねえ・・・いや別に作者が嫌いってわけでは無いですよ？

なんか・・・出しにくい・・・原作でもあまり活躍して無かったよ
うな・・・

ほかのメンツはバグっぷりとか披露しまくってるのに・・・

此処までの10話の細部を修正―2011/09/20―

11話（前書き）

作者名、本名に戻しました！

ええはい、私です！知っている人も知らない人も居ると思いますが・

・

パクリじゃないですよ？パクリじゃないですよ？

私の作品ですよ？本当に！（言ってるなんか嘘に聞こえる・・・）

では11話お楽しみください！

11話

ラカンと戦ってから一週間後・・・

その間に帝国に雇われた傭兵とか傭兵とか・・・あと傭兵とかと戦いつつ

一路グレートブリッジへと向かっている

「グレートブリッジってどんなところなんです？」

「どんなところ・・・ですか・・・？」

私の質問にちよつと困っていますね・・・

ふふふ・・・困れ困れ、考えろ考えろ・・・いつもセクハラとかされてるお返しだ・・・

「一言で言えばバカデカイ橋・・・だな・・・」

ナギが簡潔に言います、確かにあれはそれしか表現が出来ないですね・・・

「で、何でそこにむかってるんです？」

「グレートブリッジ奪還作戦に召集されたんだ」

そうか・・・でも、奪還作戦の時・・・ラカン居なかったっけ？

そんな風に思考していると・・・

「よー！ー！またあったな！ー！ー！けっちゃんくつけよーぜー！！」

「バカが出た」

「バカができましたね」

「バカじゃな」

「バカだ」

「よっしゃー！やるぜー！ー！！」

あ、こっちにもバカが居た・・・

崖の上からラカンが登場、全員でバカ宣言したにもかかわらずナギだけがやる気満々に・・・

「バカはバカに任せますか・・・」

「そうですね」

「そうじゃな」

「そうだな」

上からアル、ゼクト、私、詠春という順に・・・

ツガアアアアン

おおさっそく木が吹き飛びましたよ・・・

しかし、此処・・・町の近くなんですが・・・平気なんでしょうか？

―数時間後・・・町の酒場にて―

「ガハハハハハハハ！ やっぱつえーなーお前！！！」

「ハハハハハハハハ！ おっさんもつえーぜ！」

あれ？ 何で一緒に酒なんて飲んでるんでしょう？

あ、もちろん私はジュースです

「なんで一緒にいるんでしょう？」

「さあ・・・何でだろうな・・・」

唯一思考がまあ・・・まともそうな詠春が同意してくれます

アルはアルで面白そうな事ができたと言わんばかりの顔

ゼクトは・・・なんか船漕いでる・・・

そんなこんなで、わけのわからぬまま、ジャック・ラカンが仲間になりました・・・

てか、騒がしいです・・・

ナギだけでもかなり騒がしかった日々が余計に騒がしくなりました・
・

ああ・・・平和に過ごせる日は来るのでしょうか・・・？

無理でしょうね・・・少なくとも麻帆良に行くまでは・・・

さらに時は進み・・・

作戦前夜、私の部屋にナギが訪ねてきました

「なあギン、お前も出るのか？」

何を言っているのでしょうかこの人

「出るに決まってるじゃないですか・・・」

そう言うとナギはちよつと困った顔をしました

「んー、でもな・・・本当ならお前には出てほしくないんだが・・・

」

本当に困った顔になり始めてますよ・・・

「それは、人が死ぬからですか？」

おそらくこれが正解でしょう、私は見た目的には5、6歳の少女ですから・・・

精神年齢的には20過ぎですが・・・

「そうだ、お前には出来れば人は殺してほしくない・・・」

まあ子供を心配する大人は普通そう言うでしょうね・・・

「平気ですよ？私のこの手はすでに血で汚れています、いまさらさらに上塗りするぐらい問題ありませんよ・・・」

此処まで行くと本当に悲劇の少女ですね・・・

「そうか・・・お前が良いなら・・・俺はもう何も言わない・・・」

そう言って出て行こうとしたナギですが・・・

「でもな・・・」

そう言いながら振り向いて近づいてきます・・・

「でもな、人を殺すことに慣れてほしくないんだ・・・特にお前はまだ子供だろう？」

そう言いながら私の頭を撫で始める・・・

「そうですね・・・私は・・・まだ子供・・・」

そう、私は子供・・・

「そう、貴方の・・・子供・・・」

その呟きは、はたしてナギに聞こえたのでしょうか？

しばらく頭を撫でていたナギは、作戦に遅れるなよ、と言い残して
行きました

11話(後書き)

んー内容が薄くなってる・・・

詠春の影がさらに薄くなった(ラカンのせいで)

主人公の作り話がエスカレートしていく・・・

なのに！なのに！内容が薄い！

12話（前書き）

詠春が壊れている気がする・・・
全国の詠春好きさん、申しわけない・・・

12話

「ハハハハ！斬艦剣！」

ラカンが笑いながらとてつもなく大きな剣を振るっています・・・

「オラオラー！『雷の暴風』！」

でたらめな魔力でナギが魔法を放ちます

「細かいところをなんとかせい！」

ゼクトが中級魔法で飛竜騎士を撃ち落として行きます

「ええい！障壁など意味は無い！『弐の太刀！』」

あれ？なんか詠春のテンションが・・・

「少しは防御というものを覚えてください」

アルは敵からの大魔法とかを防いだりしています・・・

私は――

『創造――人形』『創造――人形師』

人形を操って戦っています

「『百の瞳』！」

そう言いながら魔力で編まれた糸をクッと引きま

すると・・・

キラ・・・ガアアアアアアアアアン！

百体居る人形の目が光ったと思ったら巡洋艦の真ん中あたりがごっそりと消えています

「ん？」

一番弱そうだと判断されたのでしょうか？

飛竜騎士がいっぱい押し寄せてきます

「この程度で私を止めようと？『百の殺戮』！」

人形を操り、人形の持っている剣で串刺しにしています

それはまるでスズメバチを攻撃するミツバチのごとく・・・

「ギン・・・意外とグロイ殺し方をするんだな・・・」

ナギが横に飛んできました

「日常茶飯事でしたか？」

そう言いながら首を傾げつつ指を動かす

ああ・・・悲鳴が聞こえます・・・

「まあ確かにグロイな・・・」

ラカンも来ました

「そんなに言われると本当にグロくなってしまいます・・・」

それでも抑えてる方です・・・本気を出せば敵の四肢を切り刻んで・・・
（以下グロイので略）

「やめろ・・・それはやめてくれ・・・」

ナギが本気で言っています・・・

「わかりましたよ・・・」

そう言いながら人形を消して行く

「じゃあ、変わりに・・・」

そう言って取り出したのは桜色をした刀

「鳴り響け・・・『鏡幻刀』」

キイイイイイイイイイイイ

私が刀の名前を言うとその刀はそれにこたえるかのように響き始める

「『桜舞』」

ザアアアアアアアアア

何処からともなく現れる桜の花びらが私を完全に包み込む

「『霧散』」

そういうと桜は散り私も姿を消しています

「おいおい、マジで本気なのか？あいつ・・・」

ナギが呆れた声で言っています

「どうやらそのようですね・・・」

アルが肯定しています・・・

「加減を知らんのか加減を！」

貴方が言えた事ですか？ラカン

「あの技・・・素晴らしいな・・・」

あれ？詠春さん？きらきらした目でどうしたんです？

別に私は桜を使って転移してるだけなんですが・・・

「貴方に言われたくないですね・・・ラカン・・・？」

そう言いながらラカンの背後の桜の花びらに転移してラカンに刀を押しつける

「おおおお！」

さすがに驚いてますね・・・

「味方に刃を向けてどうするのじゃ」

ゼクトに呆れられました・・・

「さってと、遊んで無いでもういっちょ行きますか！」

ナギのその一言によって私たちは散開して行きました――

―翌日の日の出

「俺の故郷がある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が開発されてて、こんな大戦はもう起きねえそうだ・・・戦を始めたが最後・・・みんなまとめて滅んじまうからだってよ・・・」

ナギが何を思ったのか急に言いだす

「だが、こっちのこの戦は何時終わる？帝都ヘラスまで攻め滅ぼすってか？」

いや、戦争なんだから・・・

「やるきになりやあこの世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある！こんなこと続けてどうなる？いみねえぜッ！まるで・・・」

「―まるで、誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだよ―ですか？」

あ、セリフ取りやがった・・・

アルがナギのセリフを奪った時

「―ある意味そのとおりかもしれないぞ？」

ダンディなオッサンが・・・

「ガトウ・・・」

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ」

少年探偵団って・・・あんたオッサンじゃん、少年タカミチだけだぞ・・・

ん？ああ、何時ガトウが仲間になったかて？んー私が寝ているときに知らずと仲間になっていたようです・・・

「やはり奴らは帝国・連合、双方の中枢にまで入り込んでいる・・・
秘密結社『完全なる世界』だ」

完全なる世界・・・コズモエンテレケイア・・・フェイトやデュナ
ミスがいる組織ですね

そうして私たちはガトウに連れられて本国首都へと向かった――

12話(後書き)

次回はもしかしたら完全なる世界との戦闘・・・？

あくまで予定です

そして時間進行速度が早いとお思いでしょうが・・・

まあ物語の布石なんで結構早足ですすんじゃいます！

13話

「何時になったら教えてくれるんだよ、わざわざ本国首都まで来てさ・・・」

「あってほしい人がいる・・・協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

突然声がした方を振り向くと

「マクギル元老院議員！」

「いや、ワシでは無い・・・主賓はあちらのお方だ・・・ウエスペルタティア王国・・・アリカ王女」

ちらっとアリカ・・・もとい母さんを見て

ちらっとナギ・・・もとい父さんを見ます

おや、ナギ・・・ボーっと見つめてどうしました？一目ぼれですかね？

まあいいですが・・・

「ワハハハハハ、上手い事やりやがって！こんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ、お姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしやべりしてたろーが！」

「してねっつの、なにがイチヤイチャだ！バカ！」

「なーに言ってたんだよ、俺なんか・・・」

「気安く話しかけるな下衆が！」

「だぜ~~~~~？・・・いや、ありや良い女だぜ、一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？俺あんなおつかねえ女見たことねエぞ？」

「グハハハハハハそーゆートコはまだまだカワイイ餓鬼なんだよな！てめーはよ！」

「んっだそりゃ！意味わかんねえ、触るなっつーの！勝負すつか？てめー！」

「なかが良いですね・・・」

「ああ・・・なかよさそうだな・・・」

私と詠春は呆れてジト目で見てます

「しかしよ、ワスペルタティアの王女って事はアレか？例の姫子ちゃん姉君ってことかよ？」

「いや・・・姫子ちゃんの事は・・・なんか話しくいみたいだった・・・」

「へえ・・・？」

「アリカ姫・・・か」

アリカ姫・・・ねえ・・・母さんになるのはいつでしょうか・・・？

まあそんな風に呼べる日は来ないと思いますがね・・・

そう思いながら私はその場を離れました・・・

私に視線を移していたナギに気付かずに・・・

帝国と連合に板ばさみにされた王国

ウェスペルタティア王国

その国の王女は戦争を止めるために調停役となり交渉をした・・・

しかし―それは叶わず今も戦争は続いている

「要するに、戦争をやりたい奴らが
るんだろ？ま―た『あいつら』か？」

「『完全なる世界』帝国・連合だけでなく、歴史と伝統のオステイ
ア内部まで、シンパがいるようだ・・・」

「世界全てが彼らに操られているかのようです・・・これは・・・
思ったより根が深い・・・」

戦争をやると儲かる組織・・・

つまり武器商人の組織か―またはマフィアか―と踏んでいたのだが・
・・・どうも違うらしいです

それでちょうど休暇中だった私たちは『完全なる世界』の実態を掴
むために調査を始めました

私は面倒だったのでラカンと一緒にバカンスを楽しみました

ナギは・・・アリカ王女―もとい母とデート？というか・・・アリ
カ王女が一方的に買い物に付き合わせるといふ形で休日を満喫して
いました

「このまま仲良くやってくれと嬉しいですね・・・」

私は遠見の魔法で二人を見ている

「ギリギリ・・・かな・・・？」

一応アーティファクトで見つからない様に偽装はしているが・・・

その後もなんとか見つからずに二人を見ている事ができた

「しかし、本当にあの二人が結婚するのでしょうか・・・」

私は一人部屋で呟く

もちろん答える者は居ない

「もし、二人が結婚しなかったら・・・私とネギは居ない・・・と
いうことになるのでしょうか？」

分からない、私という者が介入した結果未来がどう動くのか・・・

願わくば同じであるように――

私は町に出ていた

「まいどありー！」

なんか美味しそうだった肉まんのものを買ってそれを齧る

「・・・美味しい・・・」

意外といけたので先ほどの店に戻ってもう一二個買う

しかし、さすが首都だ人は多いわなんやらでスリなんか簡単
に仕事・・・

「おっとお嬢さん、スリはダメだよ？」

懷に忍び込んできた手を掴み注意する

みなりから見えて孤児か・・・

私が腕を掴んで見下ろしていると怖いのか怯えている

「・・・来なさい」

そういつて郊外まで移動する

「さて、貴方学ぶ気はありますか？」

私は何をしているのだろうか？

少女に聞くと彼女はコクリと頷く

「わかりました、では貴方をアリアドネーへ送ります」

そう言った瞬間私は

「『テレポーション』」

跳んだー

13話(後書き)

アリアドネー・・・どうしよう・・・どうやって入学させよう・・・
困った・・・

一応学びたい者は拒まないと原作では言っていますが・・・
どうしよう・・・困ったよ・・・

14話（前書き）

遅くなって申し訳ない・・・

でも宿題とか宿題とか色々大変だったんです！

14話

行きついた先は・・・

「貴様！何者だ！」

豪華でとても大きなお部屋でした

「なに、怪しい者で「十分に怪しいわ！」ないのですが・・・」

まあそうでしょうね・・・部屋のだ真ん中に急に現れたんですから声のした方を向くと剣をこちらに向けた女性とスーツをピシッと着て椅子に座っている女性が居た

「貴方が現アリアドネー総裁ですか？」

私は怯える少女を抱えて話しかける

「そうですが、どういった御用件でしょう？」

さすが組織をまとめるトップ落ち着いた対応です

「なに、簡単ですよ。この子を入学させてやってください」

そう言い抱えている少女に目を向ける

「一応私たちは学ぼうとする者は拒みませんが・・・」

「学費の問題ですか？それとも出身？」

私がそう言うと沈黙が返って来る

だったら・・・

「学費は私が持ちます、出身は孤児ですが・・・私の家族としまし
ようか」

そう言い少女と向き合う

「いい？今日からあなたはフィル・インゴットよ？」

少女にそう言うとき可愛くこくと頷く

「これで問題は無いかと」

そう言いつつ総裁を見ると

あれ？ため息をついてらっしゃる？

「赤き翼の最速詠唱魔術師が縁者・・・大物ね・・・」

ブツブツ言ってますが・・・何ですか？最速詠唱魔術師って・・・

「いいわ、入学を許可しましょう」

「リリア様！いいのですか！」

「セラス、此処はどこですか？」

「学ぶものを全て受け入れるアリアドネーです」

「なら分かってるわよね？」

短く会話した後私に向き直る

「入学は許可しますが・・・いかんせんその身なりはなんとかしてください、あと最低限生活に必要な道具も」

「そうですね・・・分かりました、一時間後に又来ます」

そう言い礼をして

『テレポーション』

また跳んだー

セラスsid

闖入者が来た、まさに闖入者

いや？来たというより・・・現れたと行った方が良いでしょうか

みなりの整った5〜6歳の少女とそれより少し下くらいの少女

ぶっちゃけ彼女にしがみついている少女は・・・言葉を濁さないで
言えば汚い、が第一の印象だった

「貴様！何者だ！」

此処は総裁の部屋、招かれざる客には警戒するのが当たり前

「なに、怪しい者で「十分に怪しいわ！」ないのですが・・・」

彼女の言葉を遮りつつ言う

突如部屋に現れた奴を怪しい者と言わずして何と言う！

「貴方が現アリアドネー総裁ですか？」

彼女は怯えて震えている少女を抱え上げた

「そうですが、どういった御用件でしょう？」

総裁は少なからず興味を示したようだ・・・が・・・

「なに、簡単ですよ。この子を入学させてやってください」

そう言った彼女は抱えている少女に目を向ける

「一応私たちは学ぼうとする者は拒みませんが・・・」

「学費の問題ですか？それとも出身？」

総裁はその質問には沈黙で回答した

「学費は私が持ちます、出身は孤児ですが・・・私の家族としまし
ようか」

そう言った彼女は抱えている少女と向き合い

「いい？今日からあなたはフィル・インゴットよ？」

名を付けた――

名前をもらった少女は可愛くコクンと頷く

「これで問題は無いかと」

そう言いながら再び総裁を見て来る

「赤き翼の最速詠唱魔術師が縁者・・・大物ね・・・」

総裁は何かを考えながら言っている

「いいわ、入学を許可しましょう」

私には思いもよらない発言だった

「リリア様！いいのですか！」

私が抗議すると

「セラス、此処はどこですか？」

「学ぶものを全て受け入れるアリアドネーです」

「なら分かってるわよね？」

有無を言わさぬとはこの事でしよう・・・

そう言った総裁は彼女に向き直り

「入学は許可しますが・・・いかんせんその身なりはなんとかしてください、あと最低限生活に必要な道具も」

「そうですね・・・分かりました、一時間後に又来ます」

彼女はそう言い礼をすると

『テレポーション』

一言で魔法を発動した

「やはり規格外ね・・・」

総裁は頭を抱えてため息をついている

「よかったですか？」

「ええいいのよ、学びたい者には祝福をそれがアリアドネーの掲げている言葉よ」

そう言った総裁は机の引き出しを漁り始める

「セラス？悪いのだけれどどこか空いてる相部屋は無いかしら？」

「えーっと・・・先ほどの少女の年齢だと初等部ですので・・・コレット・フランドールの部屋が空いています」

私は寮の監督もしているので部屋割は覚えている

「じゃあそこをお願い、あとコレット嬢にも話して着てもらえるかしら？」

「わかりました」

そう言い私は総裁室を出た

セラス sid END

14話（後書き）

セラスの前の総裁の名前が分からなかったのでオリジナルで作ってみました！

ちなみにコレットとはこちら辺から絡ませます、ん？何？年齢おかしいって？

んーそこは・・・魔法世界と現実世界の時間の進み方が違うということを手を打って下さい！

次はオリジナル魔法とオリジナルキャラクターの紹介話にします

さっさと次話を投稿しやがれ！っと思う方は催促の感想などくれればきつと真っ赤に燃えて書くと思われます・・・（アハハハ・・・

15話

さて、さすがにボロボロの服のまま買い物に行くのはいかんせん不味い

ならばどうするか？

『創造―服』

作ればいいのです！

簡単にワンピースで良いですかね・・・

色は白、両肩のところに薄いピンク色のリボンの付いたものを出した

「これに・・・って、んー・・・」

さすがにお風呂とか・・・入って無いよね・・・？

此処もオリジナル魔法で行きますか・・・

『創造―魔法―浄化』

そう言った瞬間フィルの体が光り輝き・・・

本来の美しさを取り戻しました！

いや、可愛いですね・・・きっちゃない時もかなり可愛かったんですが・・・

さらりとした赤毛の髪の毛、くりっとした青の瞳・・・やばい・・・可愛すぎる・・・

「じゃあこれに着替えて？」

あれ？なんで疑問形なんだろう・・・まあいいか

私がそう言うといふは可愛くコクリと頷くとワンピースに着替える

そうして、着替え終わったといふは・・・

「可愛いーーーーー！」

何この天使マジ天使！

可愛すぎです、このワンピースは正解でした！

読者の皆さんには伝わらないかもしれませんが、この可愛さは・・・マジ天使です！

あれ？なんか冷めた視線を感じる・・・

・・・仕方が無い程々にしておこうか

「じゃあ行きましようか」

私はそう言いつつフィルの手を握り買い物へと向かった――

ガヤガヤガヤガヤ

アリアドネーのショッピングモールに来ております

ガヤガヤガヤガヤ

人がとても多いです

今は彼女の私服をもう少し買いこみ、下着も買いその二つの荷物を抱えつつ杖を買いに杖屋に来てます

「すみません、この子にあった杖ってわかりますか？」

ちよっとお歳の行ったお爺さんがカウンターに居たので声をかける

「ふむ・・・少々お待ちなされ」

お爺さんはファイルを一瞥すると店の奥に引っ込んだ

「ん？」

なんとなく視線を泳がせていると値札が見えた

100万ドラクマ

え・・・

50万ドラクマ

え・・・

150万ドラクマ

ええ・・・

た、高い！何これ！高いよ？！

まあ財布は軽くなっては要るが簡単に買える金額がまだある、銀行

口座にも結構貯まっている・・・はず・・・

さりげなく焦っていると

「お待たせしました」

お爺さんが大きな長い箱を持ってきましたよ？

「こちらはどうぞでしょう？」

そう言いながら開いたその箱の中には・・・

「すごい・・・」

正直それしか言えません

なんて言えばいいんでしょう？

ただただ素晴らしい杖としか言い得ません

杖の上部は炎のような形になっていて、そこからほんのりと火の精霊を感じる

「こちらは火の精霊が宿ると言われた霊樹から作られた杖でございます」

そう言いながらお爺さんはフィルに杖を渡す・・・すると・・・

ッゴー！！

「わぷ！」

杖を握ったフィルから急に風が怒り・・・

「つちよ、燃えてる！燃えてるよ！髪の毛燃えてるー！」

青い炎がフィルの髪を燃やして・・・？

ん、まてよ？

ちょっと違和感を感じたので魔眼を起動させて見てみると・・・

精霊が踊っている・・・

正確には精霊がフィルの体の周りをグルグルと回っている

これは・・・？

「やっぱりそうか・・・お嬢ちゃん火の魔法が得意なんじゃろうな」

お爺さんがなつとくという顔をしています

「お代は要らぬ持って行きなさい」

「いや、ちゃんと「持って行きなさい」」

有無を言わさぬ顔です・・・

「で「ならば次杖を買う時も此処に来なさい」

言う前に先に言われました・・・

「わ、わかりました・・・杖が居る時はこちらに足を運ばせていただきます・・・」

まあたぶんこれからも増えるだろうし・・・

「うむ、よろしい」

お爺さんはそう言うといふの目線になるように膝を曲げて

「いいかいお嬢ちゃん、大事に使っておくれ？」

頭を撫でながら笑顔で言いました

やばい、このお爺さんに惚れそうだ・・・

軽くかっこいいんですけど・・・

そうして杖を買って？もらえて上機嫌なフィルを連れてさらに私たちの買い物は続くー

15話（後書き）

んーこれからもこの杖屋で杖を購入して行きます
てか購入になるのかな・・・？

主人公はまだまだアリアドネーに子供を入学させる気満々ですよ？
というか・・・何時になったらネギの元に行けるんだろう・・・
まだまだ続きます大戦話

この次はオリジナルな魔法や道具などの紹介です

オリジナル魔法・道具（前書き）

オリジナル魔法・道具の説明です

オリジナル魔法・道具

テレポーション

効果…テレポーテーションと同じ

任意の場所に瞬時に移動する

基本的に作中の転移術は行った事のある場所にしかいけない設定だが、この魔法はアーティファクト産なのでチート要素が入りどこにでも転移が可能となった

魔法―浄化

効果…作中にもあったように汚いものを綺麗にするという効果
基本的には病気などの悪い物を全て消し去る

なのでガンも治療できるし脳腫瘍も完璧に取り除ける
ただ、魔法の呪いとかは解けないとする

雷斬り

説明…手に魔力を集中させ、それを電機に変換して一気に叩きつけるという技

効果…麻痺が重であるが雷の特性を生かし何でも叩き斬る事が可能
設定では大きな岩ですら叩き斬ることとする

闇の指輪

説明…オリジナル魔法ではないがオリジナル魔法具として紹介しよう
ぶっちゃけた話、伝○伝の魔法具です

効果…自分の意思で操るこのとできる影を形にし魔力の量で幾らでも作りだす事が可能

氷矢

呪文…集え風よ、集え水よ、大気は集まり氷の刃を・・・氷矢

説明…大氣中に有る水分を一気に集めて凍らせて打ちだす魔法
効果…触れた物を凍らせる事が可能
威力的にはサギタ・マギカと同じ威力

斬鉄剣

説明…ルパンに出て来るあの剣
効果…説明要らないでしょ？

鏡幻刀

説明…その刃に映る物は全て幻である
ただの妖刀、超音波のような低周波の音を出す

千華刀

説明…名の通り千の華を咲かす刀
この場合の華とは敵を切った後の血である
一振りで千人を切り刻めるという由来である、実際に千人を一振りで斬れるかは謎

奥義―桜

説明…アーティファクトで作りだした大量の桜の花びらで体を包みそれを当たり一面に散らせる
散った花びらに転移して敵の背後など桜の花びらがある範囲なら何処にでも転移が可能

桜舞

説明…奥義―桜のキーを簡単にしたもの、効果はまったく同じ

霧散

説明…桜の花びらを散らせるキー

奥義―桜花斬

千華刀で使える奥義

桜の華をまといながら斬りつけるから桜花斬
特に効果は無い

システムキー―NO. 04

説明…深紅の糸が現れる

基本的に切れない糸、殺傷能力に優れた物を縛ったとしてもそこは簡単に輪切りになる

(注…この名前を募集したりしちゃいます)

創造―人形

説明…名の通り人形を大量に作り出す

形的にはマネキンの感じ、目とかも真っ白で瞳は入っていない
ぶっちゃけ想像すると作者にとっては恐怖です

創造―人形師

説明…創造―人形で作った人形を操るためのスキル
これが無いと操れないというペナルティを付けておく

百の瞳

説明…人形師のスキルを発動させているときだけ使用可能
百体居る人形の瞳から光線を出して対象を蒸発させる技

百の殺戮

説明…百の瞳どうよう人形師のスキルが無いと使えない
一体の敵に対して複数の人形で斬りかかるというかなり卑怯な技
敵が一体の場合百体の人形が踊りかかる

創造―服

説明・・頭の中で描いたデザインの服を作り出すというもの
基本的に鎧から何から何まで服装類なら何でもできる

16話（前書き）

更新遅くなりました！

更新する度のアクセス数が半端無いなあ・・・と思いつつ総合を見てみたら・・・2万4千越え・・・

思わず「え？」っと硬直しその後F5を連打していたのは悪い事でしょうか？w

まあ前置きはともかくちょっと更新が滞ってるなと思って急いで書いたもので・・・ちょっと無理感が否めませんが・・・許して下さい

16話

杖を買った？ 私たちは後は何が必要かと考えた末に小物系をかうことにした

「本当にそんな少なくないの？」

そして小物屋に入ったのだが、欲しいと言ったものが思ったよりも少なかったのだ

「これで、いいです・・・」

なんだろう・・・遠慮している気がする・・・

「遠慮しないでいいんだよ？」

まあ言っても意味が無いとは思うが言わねば

「いいんです」

「わかったわ」

私はそう言い会計へと足を運んだ

これで大方の買い物は済んだかなー

などと考えながら商店街を歩いている

と・・・

『仮契約屋』なる看板が見えました

これから一応離れ離れになる・・・何かつながりが必要・・・なのかな・・・？

などと思っていると

「ねえフィル、私と仮契約するのは嫌？」

口をついて出てしまいました

慌ててフィルを見ると

「それで、インゴットさんの家族になれるんですか？」

なんと言っているのか・・・悲しい答えが返ってきた

「はぁ・・・仮契約なんかであなたとの絆を作ろうかなんて考えた私がバカだったわね、契約なんかしなくても貴方は私の家族よ？それは忘れないで、それと私の名前はギンよ」

フィルに優しく言うときまだ少し思いつめた顔をしているが分かったと返事が返ってきた

「じゃあギンさん・・・お母さんと呼んでいいですか？」

「え・・・？」

今何とおっしゃいました？

「わ・・・私をお母さん？」

「はい！」

何処で間違えたのでしょうか・・・

「お母さんはやめて・・・せめてお姉ちゃんに・・・」

そう言うところかすみしそうな顔をしましたがこれまた可愛く頷いてくれました

「じゃあ行きましようか」

そう言って総裁の部屋にテレポートしようとする

「まって！お姉ちゃん！」

止められました

「どうしたの？ファイル」

目線を同じ高さにして話す体制を取る

「あの・・・やっぱり仮契約しよう？」

可愛く・・・首をかしげてくれました！

そうして私とファイルは仮契約をした――

総裁の部屋に戻った私とフィルは書類を書いていた

入学書である

「はい、確認しました・・・これでフィルさんは正式にアリアドネ
ーの学生です」

そう言われて喜ぶフィルと未だになっとくが行かないというような
顔をしているセレス

「では、私は所用がありますのでこれで」

そう言うとき私は問答無用で・・・

「『テレポーション』」

跳んだー

リリア s i d

はぁ・・・

入学書を書いてすぐに行ってしまったわ・・・

出来ればもう少し話を聞きたかったのだけれど・・・

と、思いつつファイルという新人生を見る

おそらく買い物に出かけた時に購入したのだろう・・・

大きな杖を持っている、そしてその手には一つの指輪がはめられている

黒い宝石と赤い宝石が二つ嵌っている

そしてそれぞれの宝石から言いようのない力が感じられる

「本当に規格外な人なのね・・・」

私はこの場に居る全員に聞き取れないレベルの声で呟く

なぜならその指輪から発せられる言いようのない力は正体が分から

ないのである

気でもない

魔力でもない

霊力でもない

むしろ本当にこの世に存在する力なのだろうか・・・

そんな風に考えてしまうのも無理は無いのかもしれない

バグキャラの集団・・・赤き翼・・・

かのジャック・ラカンもバグキャラと呼ばれているし・・・

リーダー的存在のナギ・スプリングフィールドも保有魔力がバグと言われている

（実は主人公の方が上、だが誰もわからない）

サムライマスターと呼ばれている詠春もかなり規格外と聞いているし
なにより、アルビレオ・イマとゼクト

この両名の素性はよくわかっていない

アルビレオ・イマという人物は一説に重力魔法の発案者・・・という者もいるが・・・それも定かでは無い

ゼクトと呼ばれている少年としか思えない人物はナギの師匠だそうだがどこからどう見てもナギの方が年上・・・ならば普通は逆なのではないか？

そう思うのも無理は無い

故に、ほぼ一言で魔法を使用する彼女もまたバグキャラなのだと彼女は結論付けた

そして、彼女が見込んだこの少女もまたバグなのではないかと一抹の不安を抱いてしまう私が居た

リリア s i d E N D

16話(後書き)

はい！フィルちゃんと仮契約しました！

ちなみにいつの間にか付けている指輪については今のところノーコメントで（〃。∩。；A アセアセ・・・

いやぁ・・・本当に更新遅れて申し訳ない！

え？今まで作者が何をやっていたのかって・・・？

秋葉の電撃のイベントに行ったり・・・（おしくもサイン会に当たらなかった。・・・（ $\geq \cap \leq$ ）・・・。エーン！！）

電撃文庫の劣等生を読んだり・・・

SAOとAQWのアニメ化&ゲーム化に興奮したり・・・

宿題やったり宿題やったり

そんな感じですかね・・・

ふざけんなど思った方ゴメンナサイ＞＜

まあなるべく感覚を空けずに頑張って更新して行きますよ！

次回もこんな作者に飽きずに期待してください！

17話(前書き)

ちよつと短めです

え? いつも短いって?

まあそれよりも短いということでは・・・

17話

「ふう・・・」

ファイルをアリアドネーに入学させて逃げるように本国首都まで転移する

「さてさて・・・こっちはどうなってるのかな」

そんなに時間は過ぎていないはず・・・

「とりあえず・・・下に降りますか・・・」

そう言って泊っている施設のリビング的ところに下りて行く途中で

ドオオオオオオオオオ

「ん？」

なんでしょう・・・地響きが・・・

急いで降りるとガトウとラカンが居たので・・・

「ガトウ！今の爆発は？」

「いや、わからん・・・だがしかし今あっちには姫様とナギが買い物に」

その言葉を聞いた瞬間

「なんだ・・・だったら平気か・・・」

原作通りならナギが敵を潰して証拠を持って帰るハズ・・・

「いや、だったら平気って・・・姫様が巻き込まれてるかもしれないのだぞ！」

「いや、平気でしょ？バカがついてるし・・・」

それに事実遠見の魔法を展開していて二人とも無事なのはもう見てるし・・・

今だってナギが敵を潰しに行こうとしたら姫様が止めて一緒に行くと言ってるし

「平気平気、じゃあ私はひと眠りするわ」

そう言って手をひらひら振りながら自室へと戻って行った

—その数時間後・
・
・

「・・・で」

あー詠春が・・・

「貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れまわした挙げ句！その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！」

へ本日未明正義の味方を名乗る謎の男がー

投影型テレビが何か言っているが全員でスルー

「敵の下部組織を潰しても意味はない！何のために秘密裏に調査していると！大体万が一王女殿下にお怪我でもあつたらどうする気だ！！！」

詠春が・・・凄い剣幕で怒っています・・・

私ですか？ラカンと一緒に椅子に座ってニヤニヤしてますよ

「姫さんノリノリだったぜー？楽しかったーとか言ってる」

「嘘をつけっ！」

その後も数秒詠春の説教が続いたが・・・

「詠春さーん！」

二人の子供によって詠春は黙らなければならなかった

「あの怖い冷血お姫様が今廊下で僕に向ってニツコリ・・・僕ビツクリしちゃって！あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです！確かに笑いましたよね？」

「うむ驚いたのじゃ」

タカミチとゼクトがナギの裏付けを取りました

「な？」

詠春は本当の事だとわかって黙ってます・・・しかも後ろでアルが笑ってる・・・

「それにな！」

懷をゴソゴソやり始めるナギ

「ん？」

もっとゴソゴソやり始めるナギ

「おっ？あれ？」

目的の物が無いようですね・・・

「ナギ？これですか？」

すかさず私は先ほど廊下で拾った巻物を取りだす

「ああ・・・！それだそれ！何処に有った？」

「普通に廊下に落ちていましたよ？」

私はナギに渡して再びラカンの隣に座る

そしてナギを見ていると場を仕切り直す咳をして

「ちゃんと証拠も見つけて来たぜ？」

巻物を開いて証拠を示す

「な・・・それは・・・」

そう、それは完全なる世界の確たる証拠・・・そしてこの戦争を止める事の出来るワンピース

まあ・・・止められないんですがね・・・

私は冷めてしまった紅茶を飲みつつ・・・さて、いよいよフェイトの出番だなーなんて気軽に考えていました・・・

世界の修正力が働き始めているのに気付かずに・・・

17話（後書き）

風邪ひきました！

いやあー頭が痛い&咳が酷い&鼻水が・・・etc
な状況です、まあ薬を飲んで若干良くはなってるんですが・・・

まあそんな状態でも別に書くことに支障は無いんでw
んでは次回もお楽しみにw

18話（前書き）

ふむ、かけたので連続投稿！とりや！

18話

姫様に両頬をひっぱたかれたナギをラカンと一緒に笑った後

いざ、戦争を止めるために議員のところに行ったのだが・・・

「法務官は・・・来られぬ事となった・・・」

「・・・・・・・・ハ・・・・・・・・？」

予想外の言葉に思わずガトウが固まる

「・・・あれから少し考えたのだがね・・・せっかくの勝ち戦だ、ここにきて・・・慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってねえ・・・」

「は、はあ・・・」

「いや、その・・・」

俺達の反応が薄いので戸惑ったのか一瞬目をさ迷わせる

「私の意見では無い、そう考える者も多いという事だ・・・時期が悪い、時を待つのだ君たちも無念だろうが手を引いてな・・・」

んーでもねえマクギル議員・・・よく目を見ると・・・完璧に化けきって無いですよ？

目がフェイトのまんまです

「まちな！」

「ん？」

「あんた、マクギル議員じゃねえな？何もんだ！」

そう言った瞬間ナギが議員の頭を燃やす

「ちょ・・・」

ガトウとラカンが固まっています・・・

「ちょーーーーーっ！？ナギおまつ！なにやってんだよ！元老院議員の頭いきなりもやして！お前！」

「バーカよく見ろよおっさん」

「ですね・・・」

そう言いながら私も臨戦態勢を取る

「よくわかったね、千の呪文の男・・・こんなに簡単に見破られるとは・・・もう少し研究が必要なようだ

ちなみに、本物のマクギル元老院議員は残念ながらメガロ湾の底だよ」

「てめえ！」

瞬間ナギが瞬動で殴りかかろうとしますが・・・

「通しませんよ」

「くらえ」

火をまとった男と水をまとったところが間に入り

魔法でナギを後退させるか？と思いきや・・・

「させないよ！『障壁！』」

ナギの両サイドに障壁を張る

「ぬ！」

「ぐ！」

そのまま障壁に当たった魔法は二人の男に反射する

「さんきゅ！ギン！」

ナギはそのままフェイトに殴りかかろうとしますが――

「甘いな・・・最速の魔術師、千の呪文の男」

そんな声が聞こえたと思ったらフェイトの目の前にダンディなオッサンが現れて

「ふん！」

ナギを殴り飛ばす

そしてそのまま流れるように腰にある剣を抜くと私に投げて来る

「つく！『障壁―曼陀羅』」

私はフェイトが張っている障壁と同じように障壁を張りますが・・・

ザクッ！

「何・・・」

その剣は障壁をすりぬけて私の肩に刺さった

「こいつらつええぞ！」

起き上がったナギがガトウとラカンにいい放つ

「っは！だが生身の敵だ！政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べれば

万倍！！！！

戦いやすいぜ！！！！」

「っふ・・・」

ラカンが大剣を出すと同時

「わ、わしだ！マクギル議員だ！うむ、反逆者だ！ああ、うむ・・・
確かだ！奴らに暗殺されかけた！は・・・早く救援を頼む！

赤き翼全員帝国のスパイだった！軍に連絡を！」

「げ・・・」

「やられましたね・・・」

私は剣を引き抜いて立ち上がる

『おらあああああああああ！』

ラカンとナギが突撃、私とガトウは後ろから援護をしようとする
が・・・

「君たちは少しやりすぎたよ、悪いが退場してもらおう」

フェイトが手を上げた瞬間

ゴッ！！

「ぐっ」

予想していたように建物ごと吹き飛ばしてくれたのですが・・・四
人目のおっさんがさらに剣を投げてきてそれが私にクリーンヒット

左肩にも剣をもらいました

「昨日までの英雄呼ばわりが一転！反逆者呼ばわりか・・・ヌッフッフいいねえ人生は波乱万丈でなくっちゃな」

ず・・・随分と気軽に言ってくれますね・・・ラカン・・・

「タカミチ君たちは脱出できたかなあ・・・？」

やはり歴戦の差というものでしょうか、ガトウとナギも平然としています

ん？私はどうしてるのかって？

両肩からドクドクと血を流しながらナギに抱えられています

正直に言って重傷ですよ

「・・・姫さんがやべえな」

ええ・・・アリカ姫がやばいですね・・・

しかし私もやばいのですが・・・？何時までも水に浸かってたら・・・血が・・・

私の意識は此处で途切れた――

18話（後書き）

いやー、謎のオッサン来ましたよ！

あーデュナミスじゃないです、完璧な新！オリキャラです

彼の細かい紹介はいつになるやら・・・（・ω・）遠い目

まあフェイト以上始まりの魔法使い以下と思って下さい強さ的に

さてさて、姫様救出へレッツゴー！

そして何時になったらネギが出て来るんだ・・・おーい！ねぎい！

どこだー！（笑）

19話（前書き）

若干R15な描写があります

グロテスク？なのが苦手な方は控えた方が良いかもしれません
まああまり重要な内容は書かない様にしたので・・・

ではお楽しみください

19話

ナギ sid

俺たちは反逆者として軍に追われつつ、最前線を抜けるようにアリカ王女救出へと向かった・・・

だが、そこで一つ問題が起こった

「まずいですね・・・」

このメンツの中で一番治癒魔法が得意なアルが渋い顔をする

「そんなにやばいのか？」

アルの視線の先には偽マクギル議員達との一戦以来意識を取り戻さず、両腕を真っ黒に染めたギンがベッドに寝かせられている

「ええ・・・彼女自身が肩で呪いの進行を防いでいるようですが・・・
・逆にその呪いを向ける先がだんだんと死滅して行っています・・・」

つまり、戦った時に喰らった剣が実は魔剣だったようで

さらにその魔剣の効果は推測ではあるが傷つけた者を呪いで殺して行くという物だった

「下手すると両腕を切断しなければならぬかもしれません・・・」

まさに八方塞がりという状況か・・・

正規の病院なんかに行けば対処法はあるのかもしれないが・・・今俺たちは反逆者として追われている・・・

よって何にも手が出せぬまま彼女の腕は死んで行っている

「なやんでもしかたねえんじゃねえか？」

ラカンが頭の後ろで手を組んで気楽に話す

「ああ？仲間が死にそうなんだぞ！これが悩まずにいられるかよ！」

思わずどうしようもできない怒りをラカンにぶつける

しかし実際ラカンのいう事は正しい

誰もどうする事も出来ない・・・病院に駆け込んでも反逆者として捕まり治療など受けれる保証も無い

「もしかしたら・・・」

そんなとき思いついたかのようにアルが言う

「もしかしたら、アリカ姫の王家の魔力なら何とかなるかもしれない
せん」

その呟きには全員が期待をした

そして、どうしようもない今早く姫を助け出して相談しようという

ことで全員の意見が一致し

一路隠れ家へ向かい、その後すぐに夜の迷宮へと救出しに行くという案で決まった

ナギ s i d E N D

「う．．．？」

私は両腕に感じる激痛に意識を浮上させていく

「う．．．ん．．．ここは．．．」

目を開けると知らない天井．．．埃っぽい木造の天井が私を見つめている

「一体．．．此処は．．．っ！」

自分の居る場所を確認しようと上半身を起こしますが．．．

両腕に激痛が走り再び寝ていたベッドに横になる

「うつ、つく！一体．．．」

そう言いながら私は視線をめぐらして自分の腕を見る・・・

そこには、肩から下が真っ黒になっている自分の腕があった

「な・・・これは・・・」

思わず私は自分の状況に硬直しますが・・・

「ああ・・・確かあのオッサンに剣を投げつけられましたね・・・」

状況を思い出して納得する

おそらくこれはあの時喰らった剣に毒又は呪いがかかっていたのだろう

そして無意識に取り換えが効く肩から下という生存本能で呪いの進行を防いだのだと

「さて、どうやってこれを治そうか・・・」

ではまったく動かないので顎に手をやる事が出来ず考える人的なポーズが取れませんが、小首を傾げて考える

「というか、此処はどこなんでしょう？」

改めてベッドの周囲を見るが窓が一つあるだけ・・・

その窓からの景色でも場所の確認は取れません

「まあ本国首都では無いのは確かでしょうが・・・」

痛みで回らない頭で確実な事を口にして確認する

そしてしばらくボーっとしていると

ガチャ

扉が開きました

「お、ギン起きたかよかったぜ」

ナギが様子を見に来たようです

「ナギ此処はどこですか？」

「なんだよ、子供らしく痛さで喚くのかと思ったぜ」

精神年齢が体よりも上なんです・・・そんなわけ無いでしょう

と考えますが、そんな事彼が知る由もないので許容します

「かなり痛いですが我慢できます。で、質問に答えてください」

「ああ、此処はな俺たちの隠れ家だ」

隠れ家？隠れ家・・・？

ああ・・・オリンポス山近くに有る掘立小屋ですか・・・

「隠れ家・・・ですか、でアリカ王女は救出したのですか？」

隠れ家に寄ったという事はすぐに出るはず・・・いや？もう救出したかな・・・？んーでもけが人な私を抱えたまま？

いや、出来なくないかも・・・このバグ集団なら・・・

「ああ今から出るつもりだ」

そう言いながらベッドの傍に有った椅子に座るナギ

「じゃあさっさと行ってください、戻ってくるころにはこの腕何とかしますから」

そう言いながら両腕を一瞥する

「んーでもなあ心配なんだよなあ・・・」

「たかが餓鬼一人心配で王女を助けるのを渋るのですか・・・」

ちよつと発破をかけるつもりだったんですが・・・

「餓鬼一人って・・・一応けが人なんだぞ！そんな奴放っておけるか！しかも餓鬼ならなおさらだ！」

まくしたてるように言いながら私に迫るナギ・・・

いや、近い・・・近いですよ？

「じゃあ怪我して無ければいいんですね？」

そう言った私は・・・

「『創造―双剣』」

両肩の上に剣を作りだす

あとは重力に従って落ちて私の腕を肩から斬り落とすだけ・・・

ッガ！

なのですが・・・ナギが素手でつかんで止めました

「ギン・・・今何しようとした？」

目が据わってます・・・怒ってますね・・・

「何って、腕を切り落とそうと・・・」

「餓鬼がそんなことするんじゃないよ！」

あーついに切れましたね・・・

「ですが、私の腕がこのままという事は貴方達ですら治せないという事です、だったら切り落とさない」と

平然と言いますが・・・

「餓鬼が平然とそんな事言うんじゃねえよ！これから姫さん助けて姫さんの魔力で何とかできないか頼んでみるんだよ！」

あー王族の魔力に頼ろうって事ですか・・・

「そう・・・ですか・・・」

無関心そうに返事をしますが・・・内心結構あせってます

だって私はナギとアリカの子供、つまり？

王家の魔力を保有しています！

なんか知らないですけど王家の魔力って反応するんですよね・・・

始めて会った時抑えるのに苦労しました

で、怪我なんかしてるときに魔力を抑えるだなんてそんな拷問・・・

無理です

「じゃあちやっちゃと助けて来てください、そうすればそうするだけ私も早く治せますから」

私はそう言って再びベッドに横になる

「そうそう、子供は素直にしてればいいんだよ」

そう言うとなぎは私の頭を一撫ですると部屋を出て行った

さて、ナギ達が出たのを確認したら腕治しますか・・・

気楽に考えつつさっさと行かないかなーと考えながらベッドに横になっ
ていた

19話（後書き）

さて、次回はギンによる両腕の治療です

予定としてはかなーりグロテスクになる予定です（なんでだろう、グロイ方が書きやすい・・・）

苦手な人は次も飛ばして下さい、なるべく重要な事は書かない様になります

薬って凄いですねー特に今の薬って

昨日の今日ではほぼ直りました風邪！

いやぁ・・・何年ぶりだろう・・・風邪をひいたのって・・・

まあ前回書いた通り風邪ひいても書くのに支障は無いんで書きますがw

20話（前書き）

ちよつとグロイです、耐性が無い方はお控えください

20話

「さて、始めますか・・・」

ナギ達の魔力がかなり遠くまで行ったのを確認して私はベッドから起き上がる

「つく・・・かなり痛いですね・・・」

その割には随分と冷静なんだなぁと自分で感心しておく

「んー・・・魔法でパパッとやるのも良いですが・・・」

そう言いながら私は器用に足でドアを開ける

「あんまり魔法に頼るのもねえ・・・」

向う先は台所

「『開け』」

言霊を使って冷蔵庫のドアを開ける

「えーっと・・・血止め血止め・・・」

そう言いながら魔力で中を探す・・・

「無い・・・」

無かったです

「じゃあ薬庫かな？」

どうやらこの隠れ家はナギ達が修行していた初期のころ使っていた
ようで・・・

怪我とかしたら時用の為に薬がいっぱいある部屋が存在するんです

ギイイイイ

ちょっと重そうな扉を開けると中から薬の臭いが漂って来る

「血止め・・・血止め・・・」

再び魔力で血止めを探すと

「あったあった」

かなり近くに有りました

それを魔力で浮かせて自分の部屋へと向かう

そしてベッドに座ると

「『創造―双剣』」

先ほどと同じように・・・自分の腕を―

ザンツ！

斬る！！

「ああああああああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ！！」

予想以上の痛さに思わず叫び声が漏れる

「あああああつはっはっはっはっは．．．」

なんとか落ち付けるために息を細かく吐く

「っはっはっはっはっは．．．」

そしてある程度落ち着いたので・・・

血止めの薬を傷口に塗りたくっていく

シ
ユ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ
ウ

さすが魔法世界の薬、傷口が一気にふさがっていく

「後は腕を作ってくつつけるだけ……だけど……どうしよう……どうやってくつつけよう」

さりげなく脂汗が頬を伝う

—
一時間後

「よし、魔法で生やそう！」

脳内会議の末決まりました

「『創造―腕―再生』」

そう唱えると

グ・・・グチュ・・・グチャア・・・

なんともグロテスクな音を響かせながら腕が肩から生えてきます

「ああ・・・あ・・・ああああ・・・」

生える時も痛いんですね・・・

これまた予想外の痛みに声が漏れる

「あ・・・つく・・・！」

最後とばかりに斬った時と同じぐらいの痛みが私を襲う

「くううう~~~~~」

痛みの名残に身を震わせて目を開けると

きれいさっぱり、元の腕が復活！

さて、今回の事で得た教訓

自分よりも強い敵が出てきた

という事

原作通りの敵なら基本的に勝てる・・・と、思う・・・

だがしかし、ここで敵に新たなキャラが出てきた

もしかするとこれは世界の修正力という奴か？

だとすると厄介だ

強い敵が増えれば増えるほどこの後の戦いは難航する

負けない様にするためには？

どんな攻撃にも耐えうる強靱な肉体を手に入れる？

いやいや、この体でそれは無理・・・

じゃあ・・・再生能力・・・？

「それだ！」

私は新しく作った左腕を露出させる

「『創造―刺青―効果―超再生能力』」

そう言うとき淡い光が左腕に集まりだして・・・

パアアアアア

散ったと思うとそこには面白い模様をした刺青が刻まれていた

「これで一見落着」

勝手に一見落着した私は切り落とした腕を作っておいた箱に入れて
棚の上に置いてベッドに横になった

「ナギ達帰ってきたらなんて言うんだろう・・・」

そんな事を考えている間に、私の意識はゆっくりと暗闇へと落ちた――

20話（後書き）

さて、斬った後の腕どうしようか・・・

まあもう決まってますがw

次回は腕の始末とナギが救出完了して帰って来るって感じですよ

21話（前書き）

月曜に投稿すると言いながらいざ登校しようとしたら・・・
納得いかない！

そう思って書き直しました・・・

若干納得いかない部分が未だにあります・・・

どうぞお楽しみください

21話

「んー・・・」

腕の治療をしてベッドに横になりひと眠りした後、ベッドに腰かけて悩んでいます

「これで確かに再生能力は付いたかもしれない・・・でも、戦闘能力が上がっていなければ根本的な解決になっていないような・・・」

はい、決定的な事に気が付いてしまいました

我ながら今更気付くとか情けない・・・

「んー従者が居るわけでもないから魔法使いとして戦うには前衛が・・・」

まあ魔法剣士的な感じで戦えばいいんでしょうが・・・いかんせん自信が無いです

「ちょっと遊んでみる・・・？ いやいや、真面目に考えないと生死にかかわる・・・」

そんな風に巡り巡って初めに戻ったりしてグルグルと考えています

「聖十三騎士団でも作るか？」

アーティーフアクトで作る事は可能でしょうが・・・

戦闘技術をどう組み込もうか・・・そこが問題です

「んー・・・」

だとして戦い方をナギ達に教えてもらっても、ほぼバグなので力技系が大半・・・

ラカンなんて気合いがあれば何でもできる！

的な人ですし・・・

ナギにいたってはアンチヨコを見てる始末

まあ詠春に剣術を教わるのはいいかもしれませんが・・・

なんとなく却下！

アル？遊ばれるのが落ちです

・ゼクトは魔法関係でお世話になって吸収できるものは吸収したし・・・

ガトウ？無音拳しか教えれくなさそう・・・

あれ？なんかまともに師匠として仰げる人居なくね？

いまさらながらに気付いた事に我ながらビククリする

「仕方が無い・・・ん場って想像しますか！」

ということだ

頑張ってみます！

「『創造―箱―効果付与―我の想像せし生物を作る』」

大型犬が入れそうな箱を作りそれに魔法をかける（魔法って言えるのかな？）

そしてその箱に

「資源は大切にね？」

某電機会社のキャラクターのセリフをもらいつつ、呪いを受けた腕を箱に入れる

「これで私の腕を元に私が想像するパートナーが・・・」

そう言っていると・・・

ダダダダダダダダダダ

バンツ！！！！

「ギ（グシャ！）ごぶはぁ！」

ナギが突っ込んできたので肘を置いておきました

「ってーな！って・・・え？」

すっ転んで起き上がったナギが見た物は、私の美しき両腕（誇張しました）

「なんで、腕が・・・？」

本当に混乱しているようです、笑えますね

「切り落として生やしました」

そう言って指をさす先は血止めが転がり血がべっとりと付いたベッド

「お前！なんでまってなかったんだ！」

「いや、それは限界だったからに決まってるじゃないですか」

まあ嘘ですけど・・・

「下手したら死んでましたよ？私」

そう言うとなぎは

「すまん、本当に遅れてすまん・・・」

あらら？落ち込んでいらっしゃる・・・

「そんな事より、戻ってきたという事は始めるのでしょ？」

そう言うとは私は落ち込んでいるなぎと箱を担いで外へ・・・

「じゃあアリカ様後はよろしくお願いします」

そして・・・

ジャリ

逃げる！

「こら！何処へ行くのじゃ！」

後ろからアリカ様の声が聞こえますが・・・

「難しい事分からないんで後よろしくお願いしますー」

そう言って逃げるように転移したー

「ここら辺で良いでしょうかね・・・」

そう言って私は地図を広げる

「えーっと此処は・・・」

そう言いながら地図の上に砂を撒く

「『砂よ集まり我のいる場所を示せ』」

すると龍山山脈の頂点のところに砂が集まった

「え・・・龍山山脈の頂上？」

そうしてあたりを見回すと・・・

確かに頂上でした、というかあたり一面雲だけ・・・

「ん？」

ふと大きな黒い塊が視界の端に見えたと思いそちらを向くと・・・

「何処の空中城ですか・・・」

ラ○ユタ的な感じのお城が浮かんでいました

「あそこを家にできたら最高ですね・・・」

そう言って私は地面を蹴りラ○ユタ的な城へと飛んだ

21話（後書き）

ラ○ユタ キターー（。△。）——！！

っと、デザイン的にはラ○ユタを想像してもらって良いかと

自分の頭に描かれているんで納得行く絵が出来たらたぶんU
Pします

何時になるかまったくわかりませんが・・・

22話

タン

とりあえず庭的な感じのところに降り立ってみた

「誰かいませんか―」

一応誰かの所有物だったら不法侵入になってしまうので、おそらくギリギリの範囲のところで叫んでみる

「誰か―」

んー誰も居ない？

仕方が無いので魔力で気配を探ったところ・・・

「強い魔力元と弱い魔力元・・・？」

下の方からとてつもなく大きい魔力と城の上の方からよわよわしい魔力が感じられる

「うりゅりゅ？」

そんな風に魔力を感じて考えているとかなり謎な生物が私の目の前に居た

「うゅ？りゅ？」

丸いモフモフした・・・猫？的な生物は何か封筒みたいなものを咥えていた

「私に読めと？」

言葉が理解できるとは思わなかったが一応聞いてみる

「りゅ！」

すると激しく頷いた、ちなみにその時封筒がグシャっと言ったが・・・まあ置いておこう

「じゃあ遠慮なく」

そうして封筒を受けとり中を見る

『この城に訪れる人が善良なる方である事をまずはじめに祈りたいと思う、そして私の勝手な頼みを聞いてくれないだろうか？』

私は昔戦いが嫌いだった、そして空に行けば誰も私と戦おうとは思わないと思いこの城を作った

しかし私一人ではさすがに寂しかった・・・だから偶に下を魔法で覗いていた

あるとき村と村の間での小競り合いがあった、どちらの力も同じぐらいで五分五分だった

しかし片方の村が非道な事を始めた

忌子を生贄に悪魔を召喚しようとしたのだ

私はその子を助けた、だがその子は全てを拒絶するようになり力が制御出来なくなった

私はこの子を救うために封印を施した、だが子の城に籠ってからめったに魔法を使わなかったために魔力の込め方を間違えてしまった
我ながら情けないと思う

そしてその子はこの城の地下で眠っている

もし、この手紙を読んでいる貴方が魔力運用に長けているならその子を救ってやってはくれないか？

もちろん私の身勝手な頼みだ、変わりにこの城を上げようと思う

好きに使ってくれてかまわない

最後に、この頼みを聞いてくれるなら私に貴方の顔を見せてはくれないか？
』

手紙はそう書いてあった

魔力制御が出来ない子供が地下に封印されているということだろう

魔力制御？簡単だ、それでこの美しい城が手に入るなら万々歳だ

「ねえ君？ご主人様のところに連れて行ってくれるかしら？」

私が封筒を持って来た生物に聞くと再び激しく頷くと城の中に入って行った

しばらく豪華過ぎず飽きない感じのデザインの廊下を上へ上へと登っていく

「りゅーりゅーりゅー」

そして大きな一つの両開きの木の扉の前で謎の生物が撥ねる

「此処？」

扉の前に達生物に聞くと頷きながら撥ねる

私は苦笑しながら扉を押し開いた

ギイイイイイイイイ

扉は重苦しい音を立ててゆっくりと奥へ開いていく

部屋の中も廊下と同じで飽きない感じのデザインだった

ただ驚く事は部屋の壁の内二つが本で埋まっていた事だろうか・・・

視線をめぐらすと天蓋付きのベッドがあった

老人が一人横になっている

私とそのベッドの横に行くと

『貴方が私の頼みを聞いて下さるのですか？』

おそらく喋る事も出来ないぐらい弱っているのだろう

「ええ、多少自信がありますので」

私はベッドに居る老人の手を握り魔力を流してみる

しかし

『私に魔力を流しても助かりませんよ?』

明らかに魔力不足な老人はそう答えた

その答えの通り流した魔力は老人には入らず空中に霧散して行った

『私が使った封印の術の副作用です、死なない程度にジワリジワリと魔力が霧散して行くのです』

老人がそう答える

『ああ・・・これでやっと胸のつかえが取れました、どうかあの子を助けてやってください』

そう言う老人の存在がだんだんと薄くなって行く

「任されました、安心してお眠りください」

私は数秒黙祷してから老人の体を抱き上げる

そうして来た道を再び通り庭に出る

「『創造―墓』」

私は一人の子供の為に尽力した彼を弔わずには居られずにこの城と共に要るまでも居られるように此処に埋めることにした

さて、次は引き受けた仕事をこなしてこの城の永住権を頂こう

墓を完璧に整えて手を合わせた私は、城の地下へと足を向けた

22話（後書き）

某ゲームの某キャラに似てますが・・・デザインの同じです
（あえて何のゲームかはいいませんが）

内容通り浮遊城を居城とします

まあ仕事成功したら・・・ですが・・・

23話（前書き）

次の話の布石何で超短いです、ごめんなさい

23話

カツンカツンカツン

石畳の廊下を歩く音が響く

薄暗い地下の通路には謎の生物が結構いた

なんか動きが某アニメの黒いウニ的な感じなのだが・・・

カツンカツン

カサカサカサカサ

さりげなく怖いよ？

私は気配を探りながら強い魔力がある部屋へと向かっている

「ここですか・・・」

大きな石の扉、両側には消える事の無い魔力で維持されている炎がともっている

「失礼して・・・」

ギギギギギギ

先ほどの扉よりも重い扉を開けて行く

「わぷっ」

少し隙間が開いただけでとてつもない量の魔力があふれ出てきた

「ぬ・・・くうううう」

仕方が無いので魔力無効化の力を表に出して扉を開けて行く

「んっど・・・」

人が通れる程度に開いた扉から入り中を確認する

中央にベッドそしてそこに少女が横たわっている

額と両腕あと両足に魔法陣が刻まれていてそれが魔力を抑え込んでいる

幾ら忌子といえこの魔力量は・・・

ナギ以上の魔力保有量だ、むしろ生産に器が追いつかないで漏れ出している

「『創造―腕輪―効果―魔力消費』」

まずはこれで試してみよう

簡単に作った腕輪だがまあなんとかなるのではと思ったのだが・・・

ピキ・・・パキヤアアアアン

魔力を受けすぎて一気に砕けた

「えーーーーー」

消費が追いつかないとかどんな量の魔力だよ・・・

もしかしてもしかするとこれは本人の意志で抑えないとダメな感じか？

私は少女を起こそうと試みるが・・・

・・・ダメだった

何をしてもし起きない、というか起きたくないという感じだ

「んー・・・手ごわいなあ・・・」

私はそう思い手紙をもう一度見る

―全てを拒絶するように―

この一文がこの結果・・・なのだろう

「という事は過去に、特にこの生贄というところがヒントのようね・・・」

そう言って私は少女の額に自分の額を合わせ

「『レコーディング』」

自作の魔法で彼女の記憶を覗く事にした―

23話(後書き)

・ さあ、次もつと面白くせえへんと・・・(//。D; A アセアセ・
・

24話（前書き）

悲しい物語です

24話

少女は生まれながらに忌嫌われる存在だった

少女はその生まれにより全てに拒絶される存在だった

子供は親を選べない――

少女は親の身勝手な恋によって生まれてしまった

「帰れ――化け物――帰れ――」

村の子供たちが一人の少女を苛めている

私は上空から精神体のような形で見ている

石を投げられていた少女は泣きながらどこかへと走って行った

「お母さん、どうして私は化け物って呼ばれるの？」

銀色の髪をして深紅のような瞳の少女はその瞳で母を見つめて聞く

母と呼ばれた女性は苦笑いをし

「彼らはね、外見だけで全てを決めてしまう愚かな人たちなのよ」

母親はそう言々と少女の頭を撫でる

しかし少女の唯一の理解者も消えてしまう

夜――

「なんですか！貴方達は！」

どうやら手紙にあった生贄に少女を使うために村人が押し寄せたようだ

「忌子を渡せ！」

「っ！誰が貴方達の身勝手な小競り合いに娘を渡すもんですか！」

母親はそう叫びクワで村人に襲いかかる

数人を倒す事ができたが数の暴力には勝てない

すぐに殺されてしまった

「っけ、忌子の親がやっと本性表しやがった」

乱暴に母親の体を投げ捨てた村人たちは少女がまだ眠っているのを良い事に拘束して村へと運んで行った

『~~~~~』

聞いた事の無い呪文を唱える村人たち

広場に書かれた魔法陣の中心に少女は寝かされている

『~~~~~』

身勝手の村人たちは呪文を唱える、悪魔を召喚するであろうと信じ
た呪文を

「う・・・ぐっ！あああああ」

少女が弱弱しく呻き始める

村人は術が最終段階に入ったとみて呪文を唱えるのをやめた

「ああ・・・ああああ・・・あああああああああ!!」

だが、その呪文は悪魔を召喚するものでは無く、魔力を解き放つものだった

嵐のような魔力の渦が広場を襲う

「あああああああああああああああああああああああ
ああ」

無理やり魔力を解放された少女は悲鳴を上げている

どれぐらい経っただろうか？

その村の村人たちは魔力に当てられて全て死んだ

魔法に普段接しない彼らは魔力の体制が無いためどんどん弱って死んで行った

「これはひどいな・・・」

すると上空から一人の青年が降り立った

おそらくこれが先ほどの老人だろう

「これは並大抵の封印ではダメだな・・・」

そう言った青年は彼女に近づき額と両手両足に魔法陣を刻む

「私の魔力を使い彼女を救いたまえ」

そう言うと五つの魔法陣があわく光一時的に魔力の放出が止まった

それを確認した青年は少女を抱え空へと飛んだ

城では青年が悩んでいた

魔力の放出を止めては見たが少女が起きないのだ

もしや自分の魔法が少女の意識まで封印してしまったのではないか
そうブツブツ行っていた少年は彼女の額に手を置いて動かなくなる

しばらくそのまま微動だになかった青年は急に脂汗をかいて後ず
さった

「まさか・・・これほどまで全てを拒絶しているとは・・・」

どうやら彼女は青年が脂汗をかいて狼狽するほど全てを拒絶してい
るようだ

化け物と呼び拒絶する村の子供

母を傷つけ殺した村人

唯一愛してくれた者が消えた絶望

自分が自分を否定する虚無感

これらが彼女の意識が戻らない原因なのではないかと紙に書いていく

だが、意識は戻っている

事実私は少女の記憶を見ているのに青年が出て来るのはおかしい

もしや？と重い私は精神の接続を切った――

24話（後書き）

上手く物語として仕上がっているでしょうか？

結構悲劇系の物語を書くのは得意？（得意と言って良いものか・・・

）なのですが・・・

やはり作品の中に物語を一つ入れるのは大変です

まあ楽しんで読んでいただけたら幸いです＞＜

25話

彼女の記憶から精神を切った私は少女に話しかける

「貴方の全てを奪った存在が憎いか？」

私が彼女に問いかけると少女が頷く

やはりそうか

彼女は人、いや魔力の反応が傍に来ると意識が覚醒するのだ

原因？分かりませんよそんなの

「じゃあ貴方はずっと籠ったまま生きるのか？」

普段するような事じゃないから口調が荒々しくなっている気がする

この問いにも頷く

「たとえば自分を受け入れる存在がいるとしてもか？」

この問いには少女は答えない

「私は貴方を受け入れよう、もちろんうわべだけの事じゃ無い

貴方を愛し貴方の為に貴方を叱ろう

貴方の死んだ母の代わりとは言わぬが精一杯愛そう

それでもダメか？」

少女は迷っているようだ・・・

「では先ほど老人が亡くなった、それは貴方を助けるために死んだのだ

その老人の願いをむげにするつもりか？

貴方を助けるようにと私に頼んだ老人の最後の願いを」

そう言うとき少女から若干の反応が返る

「そうだ、貴方を愛した人は母だけでは無いお前を此処に連れてきた老人も愛してくれていた、そして私も貴方を愛そう」

そう言いながら少女の額に触れる

すると彼女の意志が流れ込んで来る

―愛されたい、愛してほしい

「だったら魔力を抑えなさい」

―出来ない、分からない、どうすればいい

一言一言絞り出すような意志が手を伝わって私に伝わる

「自分の体から出る魔力を認識なさい、それは貴方の物です

今は勝手に暴れているだけ、貴方がその魔力に命令すればすぐに収まりますよ?」

私は基本的な事を教える

―分かった

一言了承の意志が流れ込むと同時に

放出されていた魔力がだんだんと収まっていく

「そうそう、その調子」

どんどん魔力が抑えられて行く

「もうちょっと、頑張りなさい」

少女の額から両手に手を移して励ます

今まで放出されていた魔力がほぼすべて抑えられた時

「ありがとう」

一瞬誰がしゃべったのかわかりませんでした

でも彼女を見てみると泣きそうな顔でこちらを見ていました

「どういたしまして」

私は満面の笑顔で返しました

さて、彼女の魔力も抑えられたので・・・

そう！晴れてこの城は私の物！

思わず叫びそうになりましたが自重・・・

ちなみに少女の名前はクーミル・アミルだそうです

可愛いですね

そんなこんなで今家事を教えています

料理はちよつと危険なので洗濯や掃除から、ちなみに掃除の練習場は困りませんでした

だって、城じゅうの部屋が埃だらけ

一体何年放置したんでしょう？

掃除の練習も終わり私が豪華な食事を作った後、一服していると

キイイイイイイイイイイイ

指輪が鳴りました

「何？ フィル」

指輪を耳に近付けつつ喋る

『今日から長期の休暇に入ったので姉様のところに行きたいです』

あら可愛い・・・って姉様？

「あの、姉様ってどういう事？」

私が若干焦りながら聞くと

『いえ、コレットに姉様のことを話したらそう呼んだ方が良いと・・・』

・
』

コレットめ・・・どうしてくれようか・・・

「ふう、仕方ないわねそのままが良いわよ

じゃあ明日アリアドネーに迎えに行くから総裁の部屋に居なさい、
少々総裁に用があるので」

そう言うと指輪から分かりましたと返事があり通信が切れた

「ふう・・・」

私は残った紅茶を飲み干そうとカップを手取る

「あのお・・・ギンさん今のは？」

「ん？ああ私の義妹よ、アリアドネーに居るの」

私がそう言うと彼女は何か考えるように俯いてしまった

はてどうしたのだろうか？

聞こうと思ったがもう寝ますと言われてしまったので結局聞けず仕舞いだった

さて明日はファイルを迎えに行かないと・・・ついでに色々買い足さないと・・・

そんな風に考えつつ私も眠りに付いた――

25話（後書き）

次はファイルを迎えに行く前の話です
たぶんかなり短くなります・・・

誤字・修正点を修正 2011／10／29

26話(前書き)

短いですがご了承ください

26話

夜私はアミルの様子が気になりアミルの部屋の前まで来ている

「アミル？入りますよ」

一声かけて扉を押して入る

部屋に入ると窓の棧に腰かけて外を眺めているアミルがすぐに目に入る

「アミル？何を悩んでいるの？」

前置きなどで話が長くなるのが嫌いな私は単刀直入に聞く

しばらく考えたような雰囲気を出した後

「私って忌子って言う存在なんですよね？」

「ええ、そうよ」

彼女には自分が何で拒絶されていたかを放してある、もちろん私はそんなことは関係がないと伝えたくて

「じゃあ・・・「それはないわよ」え？」

「どうせ貴方は明日私が迎えに行く子に拒絶されないかなんて考えているんでしょうけど・・・」

言いながら彼女へと近づいていき

「私の妹がそんなこと気にすると思っているのかしら？」

頭を撫でながら言う

「そう・・・かな・・・？」

今にも泣きそうな顔で見上げて来る

「大丈夫、大丈夫だから安心しなさい・・・」

そう言って彼女をベッドに寝かせて寝付くまで傍に居た

「そう、大丈夫よアミル・・・私の家族は変わってるのだから・・・」

最後に一言そう言うとい私は自分の部屋へと戻った

26話（後書き）

根深くトラウマのように傷が深く残るアミル
さて、フィルと出会うことでその傷はいやされるのでしょうか？

27話（前書き）

今日から修学旅行です、海外なので携帯で投稿する事すら出来ません
又かよ！って思った方ゴメンナサイ・・・一応もう一話予約投稿し
てありますので許して下さい

27話

私は今アリアドネー総裁の部屋に居ます

「お久しぶりですね総裁」

そう言いながらお土産のお茶の葉を渡す

「ええ、本当に久しぶりね・・・今日はどういった御用件かしら？」

なんだか呆れていらっしゃる？

「いえ、ファイルに長期休暇になったということで休暇の間一緒に過ごすために迎えに来たのですが・・・聞いて無いのですか？」

そう言うとは

「ええ、確か・・・この辺に長期外出の申請書が・・・」

えっと・・・なんかグラグラしている書類の山を漁り始めましたが・・・平気なのでしょうか？

「あったわ！」

そう言って引っ張り出す、かなり絶妙な力加減なようにグラグラしている書類の山は崩れなかった

「えーっと、ええ確かに書いてありますね・・・」

総裁が書類を確認していると

コンコン

「失礼します、フィル・インゴットが来ております」

そんな声がしたと思ったらフィルとセラスさんが入ってきた

「お姉さま！」

フィルはそう言うかと私に飛びかかって来る

「久しぶりですねフィル」

飛んできたフィルを優しく抱きとめて地面に下ろす

「元気に勉強してましたか？」

「はい！」

さてと、じゃあ後は総裁に今後の予定を・・・

「それと今日来たのはもう一つ理由がありました」

「もう一人？それとも二人？きっとあなたの事だから入学させろと
いうのでしょうか？」

予想されていました

「ええ、そうです。しかしちょっと特殊な子で……いわゆる忌子と呼ばれる存在なのですが……」

「別にアリアドネーはどんな存在でも学ぶ意志があれば入学できますよ？ たとえ犯罪者であっても」

そう言うとき軽くウィンクして来る

「わかりました、では長期休暇が終わったら連れてきます……」

そして私はお辞儀してフィルの手を掴み転移した

ツタ・・・

私たちは庭に転移した

「さて、ではあなたに新しい家族を紹介しないかね？」

フィルの頭を撫でながら言う

「新しい家族・・・ですか？」

「ええそうよ、それと外見で決めつけてはダメよ？相手の本質は中身で決めなさい」

目を見て強い意志を込めて言うといふは黙ってコクリと頷く

「じゃあ行きましょうか」

私はファイルを連れて談話室へと向かった

「アミル？ 居るわよね？ 入るわよ」

一声かけて部屋へ入るとお茶とお菓子を用意しているアミルがこちらを向く

「お帰りなさいギンさん・・・それでその子が？」

「ええそうよ、この子が妹のフィル。フィル彼女が新しい家族のアミルよ？ さあ自分で自己紹介して？」

そう言い私は一歩後ろに下がる

「フィル・インゴットですヨロシク！」

フィルはそう言うと言を出す、つまり握手を求めているのだ

しかし今までこんな風に接された事が少ないアミルにとっては混乱の極みだったのだろう、私を困惑の目で見る

しかし私が何も言わないので観念したのか

「クーミル・アミルですよろしくお願いします」

フィルの手を握り返した

若干ぎくしゃくしているがとりあえずはこれで良いと私は納得し二人を座らせてアミルの用意したお菓子とお茶を楽しんだ

その日の昼食を取った後

「姉さま、魔法を見てほしいのですが・・・」

フィルが勉強の成果を見せたいと言ってきました

ということ・・・今庭の一角にある石畳でできた訓練場のような所に居ます

てか、この城かなりの設備が整っています

「では行きます！」

そう言うのと魔力を練り呪文を唱えて行く

『契約により我に従え 炎の精霊集い来たりて敵を討て！紅蓮蜂！』
アベス・イグニフェラエ

ズガアアアアアアアアア

真っ赤に燃え盛る大型の蜂が大量に現れ、的に向って一斉に向って飛んでいき・・・大爆発・・・！

「姉さまどうですか！」

目を爛々と輝かせながら見て来るフィルに私は苦笑いしかできなかったのは当然の事だろう・・・

27話（後書き）

さあファイルの魔法初お披露目！

つってもオリジナルでも何でもないです、火のアーウェルンクスが使っていた魔法です

つまり？アーウェルンクス並みの火の使い手と言う事です
これからの成長が楽しみですね^^

28話(前書き)

今頃オーストラリアです、きっと熱いんでしょうね・・・

ではお楽しみください

28話

さて、ただいま居城から遠く離れたグラニクスに来ております

なしてこんな所に？という人も居るでしょうが・・・どうも気になる
ったんですよね・・・

こう、虫の知らせ的な感じで此処に来ないといけない気がして・・・
ということで観光も兼ねてアミルとファイルを連れて商店街を歩い
ています

「ねえねえお姉さまあの高い建物は何ですか？」

この町一番の高い建物を指さしてファイルが言う

「あれはたしか剣闘士達が戦うための会場よ、見に行ってみる？」

剣闘士という言葉に若干の躊躇いを示したが頷く

「アミルも良いかしら？」

「はい！」

アミルも良いと言うので行く事にした

『さあー今日の最終試合はここ最近連勝しまくっている奴隷剣闘士の少女リユースフィーだあああああああああああ！！』

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア

『対する相手は全身を漆黒のローブで覆った影使い！御影だあああああああ！！』

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア

私たちは今試合を見るために座席に座っているのですが・・・

あの青髪の少女・・・リユースフィーと言いましたっけ？

何か・・・感じる・・・

そんな風に考えていると試合が始まっていた

『おおーっと！開始早々御影！全身全霊と言わんばかりの影の槍だ！！！！』

司会が解説している通りものすごい数の影の槍が彼女を襲う

『さすがにこれは防ぎきれないか？・・・いや！防いでいる全て防

いでいる!!』

何と良く見ると少女の手には水でできた剣が握られている

何処から出したのだろうか・・・

『今度はリュースの反撃だー!! 水弾が雨霰の様に降り注ぐー!!』

攻撃を防ぎきった彼女はどこからともなく出現させる水弾を御影という影使いに打ち込んで行く

『これはほぼ全てが命中している! これは凄い! 凄すぎるううううううう!!』

てかテンション高くね司会の人・・・

そんな風に考えていると・・・

「水ノ聖剣!」
ウォーターエクスカリバー

少女が手を天に向けて突き出している

『来たー!! 彼女の必殺技と言われている水ノ聖剣さあ! これを御影選手はどう防ぐのか!』
ウォーターエクスカリバー

いや、防ぐも何もあったもんじゃないと思うんですが・・・

御影選手もうボロボロですよ?

彼も降参しないのは奴隷剣闘士に負けるのが嫌なのか・・・それと

当然ですね、あの御影とか言う人相手を侮りすぎです

静かに見ていたファイルも戦い方を覚えようとしているのでしょうか？

凝視しています、アミルもなんか憧れ？いえ、違いますね・・・決心したような顔つき・・・が・・・？

二人の変化に若干戸惑いつつも私たちは観客席を離れた

「おい！何でもっと時間を引き延ばさなかったんだ！」

怒号と共に何かを殴る音が通路の奥から聞こえてきます

「まったく、後一分長引かせてれば賭けで勝ってたのによ！」

そう言えばリユースの方は奴隷剣闘士でしたね・・・まさか・・・
主人が賭けで金儲けをしている？

「すみません何をしてるんですか？」

フィルとアミルがトイレで居ない事を良い事に話しかける

「ああん？誰だテメエ・・・」

いやあ・・・あからさまにガラの悪そうな男です・・・

肩に刺青、ピアスに指輪、貴様は何処のチャラ男だと言いたくなつてしまいましたが・・・自重自重・・・

「いえ、何やら怒号が聞こえたのでどうしたのかと・・・」

しれっと言ってみます、しれっ

「テメエにやあ関係ねえよ、さっさと消えな」

まるで虫を追い払うかのような手のしぐさ

「いえね、何かを殴ったような音が聞こえた物で・・・おかしいですね、そこに倒れているのは先ほどの剣闘士さんでは？」

男の後ろ、暗がりの中にリユースと言われていた剣闘士が倒れている

「御主人の言いつけを守れなかったから御仕置き中だ、お前には関係ねえよ何度も言わせるな消えな」

再び同じしぐさ

「確か奴隷剣闘士と言われてましたね・・・つまるところ一応商品なのでしょう？実は護衛を探していたんですよ、ちょうど良いですその子を買わせていただけますか？」

もう、営業スマイルも顔負けなスマイルで言ってやる

「ああ？俺がこいつを売ると思ってんのか？」

「ではこれぐらいでどうでしょう？」

凄む男に小切手を出して、新世界で軽く一生遊んで暮らせるという金額を提示してみる

「うっ！」

さすがに揺らぎますよねえ・・・

「ささ、どうでしょう？今ならこの場での取引が出来ますが？」

あれー完璧に営業モードにはいっちゃった？

「し・・・っしかたねえなあ、そんなに頼むんなら売ってやるよ」

へっへちよろいもんさ、こんなはした金で有能な子を手に入れられるなんて・・・

おっとっと、自重自重・・・

「では契約成立ですね、奴隷の契約球を渡して下さい」

そう言いながら手を出して球を受け取る、その際に主従の譲渡を行う

「確かに確認しました、ではこちらが小切手になります」

サラサラと金額を書いて自分の署名をする

「銀行に行けば「知ってるよそんなこと」・・・結構」

あばよ、と一言残して彼は去って行きました

さて、この子の事をどう説明しようかと考えながら、かなり弱ってしまっているリユースを抱いて先ほどの場所へと戻った・・・

28話（後書き）

新たに増えたりユース、皆さんはもうお分かりですよ？

ファイルに続いてリユースもか！って思った方はこの先の成長を楽しみにして下さい

分からない方もこの後の展開を期待して待っていただけると幸いです

そして、そろそろオリジナル設定第二弾を紹介した方が良いのかな

あ・・・なんて考えてますが・・・どうでしょうか？

欲しかったら言うて下さい、帰ってきたら追加します＞＜

謝罪

ネタが出てきません！いえ・・・正確にはわんさか湧いています。

しかし！！

まとめられねえ・・・orz

そんな状況下で、さらにテストが！

右往左往する毎日です

修学旅行の後すぐに中間ってどう思います？

鬼畜！っと言えません・・・。。。(≡∇≡)・・・。
エーン！！

ということでかなり間が開きそうです（今でも開いていますが・・・）

出来れば今週中に一話ぐらいは投稿したいと思っておりますが・・・

あれも！これも！それも！やつも？全てまとめるのはなかなか大変です（〃。∇；A アセアセ・・・

長い目で多めに見てやってください＞＜

29話（前書き）

遅くなって申し訳ないです

スランプ+まとめられないが遭い重なり、さらに別の小説まで書き始める始末・・・

まあ詳細はあとがきで・・・どうぞお楽しみください＞＜

29話

未だに気絶しているリユースをお姫様抱っこしてフィルとアミルを待つ

「姉さまただいま戻りました」

二人が小走りで駆け寄って来る・・・が

「姉さま！何処で拾って来たんです！」

「拾って来たって・・・犬や猫じゃないんだから・・・それとこの子はリユースフィーよ、主人に乱暴にされていたから思わず買ってしまったは・・・」

そう言いながらリユースの顔を見る

「酷い事・・・ですか・・・」

アミルは自分の過去を思い出したのか俯いてしまった

「でもね？私たちがそんな酷い事があったなんて忘れさせてしまえばいいのよ？」

両手がふさがって二人を撫でられないのは口惜しいが・・・

優しい声で言う

「そう・・・ですよね！私たちが、これから楽しい思い出を作ってあげれば！」

アミルが強い目で私を見つめる

「そう、その気持ちを大切にしていってね？」

二人の決意を確認して私は私たちの家へとゲートを繋げた――

―所変わってオスティアでは・・・

「どうする・・・赤き翼・・・なかなか厄介な集団だぞ・・・」

漆黒のローブに仮面を付けた長身の男が仲間に語りかける

「バカをリーダーにするような集団だ、特に気にする必要も無かるうて・・・」

「我々が早々に負けるわけが」「この前負けたのは何処のどいつじゃったかな?」「ぬぐッ!!」

赤毛のダンディなオッサンと青毛のダンディなオッサンが話していると身長の高いローブが歩いて来る

「この前秘密基地の防衛に失敗したのは何処のどいつじゃったかの・・・？」

小さなローブは手を顎に当てて考えるふりをする

「ぐ・・・我々・・・です・・・」

「侮ってはならぬぞ・・・あれはもはやバグじゃ、幾ら世界の創造主が居たとしても奴は人間・・・リライトは効かぬのだ・・・」

『ッハ！』

「教育が大変ですねえ・・・アマテラス」

黒ローブが小さなローブに言う

「いつも教育し終わる前に壊してしまうのは何処のどいつじゃ・・・？ ああ？」

小さなローブが凄むと黒のローブも黙ってしまう

「まあ少しは頑張るのじゃな・・・奴の夢みた世界の為に、お前たちはそのために作られたのじゃろ？」

そう言う小さなローブは宮殿の奥へと入って行った

―ところ戻って城

「まだ起きないんですか・・・？姉さま」

フィルが扉を少し開けて覗いて来る

「ええ・・・今日はこのままそっとしておきましょうか・・・」

私はそう言いリュースの頭を一撫でして部屋を出た

「あ！そうだ！姉さま、アミルが話があるそうです！」

そう言う私の手を引いていつもお茶などをしている部屋に連れて行かれる

「アミル！姉さまを連れて来たよ！」

元氣よく宣言したフィルはソファの一本に座りアミルが話し出すのを待っている

「さて、アミル・・・私に話があるらしいけど何かしら？」

私はアミルが座っている向い側のソファに―座る

「お姉さま・・・私にも魔法を教えてください！」

突然そう言いながら頭を下げる

「うん、教えるのは良いけど・・・急にどうしてかしら？一応もう少ししたらアリアドネーに行ってもらうのだけれど・・・それまで待てないの？」

「はい！待てません！今日見た戦いでも私は実感しました、この世界は実力世界なのだと・・・力無い者は顎で使われ力がある者はそれを顎で使う・・・もちろん誰かを顎で使うために教えてほしいわけでは無いです、家族を・・・今は三人ですが・・・家族を守りたいんです！」

言葉としては弱いかもしれない・・・でも、その目を見たら誰でも言葉以上の事が分かるだろう・・・

澄み切った良い目をしている・・・

「わかりました・・・私が此処に残れる時間でできるだけの事を教えましょう、さすがに今日からはもう無理なのであすからね？」

そう笑いかけながら頭をなでてやる、すると嬉しそうに頷いてくれた

「じゃあご飯作りましょうか！」

そう言って私たちは三人で厨房に向ったのであった・・・

29話（後書き）

リユースはまだ目覚めません！

一応次の話か次の話で本格的に行こうかと考えています

さて、ただいま作者スランプに入り始めています

いや、ネタは出るんですよ・・・ただまとめられねエorz
な状況になってしまって・・・書いては消して書いては消してを繰り返しています

何回書いたのだろうか・・・

ということこれから若干（若干なのか？）更新が遅れて行きます
まあ正月前までには3〜5話ぐらいUPしようと思っています
出来れば今年中に大戦が終わる事を・・・

30話（前書き）

遅くなって申し訳ありません＜＜
そしてさらに短いです！ゴメンナサイ＜＜

30話

「ん・・・？」

目を覚ますと私がいつも使っている部屋とは違う部屋だった

「ここは・・・」

部屋を見渡すとよく整理された部屋だとわかる

それと共に何時もの家では無い事が分かる

そんな風に考えていると

「あら、起きたの？」

銀色の髪の女性が大きな扉を開けて入ってきた

それと同時に鼻孔を刺激する美味しそうな匂い・・・

「おなか減っているでしょう？食べなさい」

そう言って女性はトレイを渡して来る、乗っていたのは何時も私が食べている物よりも数倍良いものだった

「あの・・・「まずは食べなさい、じゃないと話聞かないわよ？」」

強制的な声・・・だが、あの人のような怒った声では無い

私を心配してくれている・・・

そう感じた私は彼女の言う通りトレイの上の食事を食べることにした

「おいしい・・・」

スパゲッティの麺に良くわからないタレがかかっているがとても美味しい

「ん、よかったわ」

そう言うと彼女は部屋にある本棚へと向い整理を始めた、気がつかなかったが床には本が散らばっていた・・・

私はそれ以降脇目も振らず全ての食事をたいらげた、実はというともう少し欲しかったのだが・・・まあ甘え過ぎてもいけないだろう・・・

トレイをベッドの横にあるテーブルに静かに置いて彼女を見る

小さな声で歌を歌いながら本を整理して行く姿はまるで図書館か本がたくさんある場所に居る妖精の様だった

30話（後書き）

リユース視点です、かなり短くなってしまいましたorz
次はいつも通りの長さですので心配なく（//。D；A アセア
セ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8723w/>

魔法先生ネギま！ 一二つの顔は誰の為？－

2011年12月16日22時55分発行